

一般国道49号亀田バイパス関係発掘調査報告書 I

城所道下遺跡
武左衛門裏遺跡

2007

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号亀田バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ

じょう しょ みち した 遺跡
城所道下遺跡
ぶ ざ え もん うら 遺跡
武左衛門裏遺跡

2007

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

国道49号は新潟県から阿賀野川に沿って県境を越え、福島県に至る重要な国道のひとつです。平成9年にはこの国道と並行して磐越自動車道が開通し、太平洋側との結びつきが強まりました。さらに、平成6年には新潟亀田インターチェンジで日本海沿岸東北自動車道、北陸自動車道と接続し、日本海沿岸の東西へ延びる高速自動車道の玄関口ともなりました。

平成16年の横雲バイパス開通後、阿賀野川より東側の地域と新潟市街地間の交通量が増加したため、亀田バイパスでも交通渋滞や交通事故の増加など環境に悪影響を与える様々な問題が生じています。

そこで国土交通省は亀田バイパスの拡幅4車線化を計画し、この区間の混雑解消を図ることにしました。

本書は、この拡幅工事に先立ち、平成18年度に実施した城所道下遺跡・武左衛門裏遺跡の発掘調査報告書です。

城所道下遺跡は砂丘の後背湿地に所在する平安時代の遺跡で、当時の人々が使用していた土師器や須恵器が出土しました。武左衛門裏遺跡は砂丘上から旧河道にかけて位置を占める遺跡です。今回調査したのは旧河道部分にあたる場所で、近世以前の遺構が検出されました。出土遺物の時期幅は縄文時代から近世と幅広く、この付近が長い間人々の生活の場であったことがうかがわれます。

この調査成果を歴史のみならず、自然環境を究明するための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の計画段階から実施に至るまで、格別のご配慮をいただきました国土交通省新潟工事事務所、本調査に多大なるご協力とご支援を賜りました亀田郷土地改良区ならびに新潟市教育委員会・新潟市歴史文化課に対し、厚くお礼申し上げます。

平成19年5月

新潟県教育委員会

教育長 武藤 克己

例　　言

- 1 本書は新潟県新潟市江南区城所字道下甲 96 番地 1 ほかに所在する城所道下遺跡、新潟市江南区日本 3 丁目 34 番地ほかに所在する武左衛門裏遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼し、平成 18 年度に実施した。
- 3 現場の管理・運営は株式会社野上建設興業に委託した。
- 4 本発掘調査および整理作業は埋文事業団職員 2 名と株式会社野上建設興業の委託調査員 2 名が担当した。
- 5 グリッド設定・グリッド杭打設および遺構の平面測量は株式会社野上建設興業に委託した。
- 6 遺構の写真撮影には 35mm カラーリバーサルフィルムを中心に、必要に応じて 6 × 7 判カラーリバーサルフィルムを用いた。補助的にデジタルカメラで撮影した。調査終了後にカラーリバーサルフィルムの画像は報告書作成・記録保管のために必要な部分をデジタル化した。
- 7 出土品物および調査・整理作業に係る各資料は、一括して県教委が保管・管理している。資料の有無や閲覧希望は県教委に問い合わせ願いたい。
- 8 遺物の註記は、城所道下遺跡を「ジョウミチ」、武左衛門裏遺跡を「ザエ」とし、出土地点・層位等を併記した。
- 9 報告書掲載遺物の番号は遺物種別に関わりなく、遺跡ごとに通し番号を付した。本文および観察表・図面図版・写真図版の番号は全て一致している。
- 10 本書の図版中で示す北は世界測地系座標の X 軸方向を指す。
- 11 作成した挿図のうち、既存の図を使用した場合にはそれぞれに出典を記した。
- 12 本文中の註は脚註とし、頁ごとに番号を付した。また、引用参考文献は著者および発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、自然科学分析を除いて巻末に一括して掲載した。
- 13 城所道下遺跡・武左衛門裏遺跡の地質については高濱信行氏（新潟大学積雪地域災害研究センター）にご教示をいただいた。
- 14 武左衛門裏遺跡に係る自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託し、再編集した。
- 15 遺物写真是デジタルカメラ（ニコン D100）で撮影した。
- 16 土壌および遺物の色調は〔小山・竹原 2004〕に準拠して記載した。
- 17 各種図版作成・編集に際しては株式会社セピアスに委託してデジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真是デジタル化した遺構写真とあわせて編集した。なお、図版作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下の通りである。
本文・挿表・挿図：Word・Excel 形式のデータ・版下、遺構図面図版：原図・測量データ・レイアウト図・文字データ、遺物図面図版：トレース図（個別）・拓影・レイアウト図、写真図版：デジタルデータ・レイアウト図。
- 18 本書の執筆分担は以下の通りである。
第 I 章 土橋、第 II 章 河崎・土橋、第 III 章 石垣、第 IV 章 1 ~ 3 土橋、第 IV 章 4 土橋・大谷、第 IV 章 5 土橋・石垣・大谷、第 IV 章 6 鈴木（パレオ・ラボ）、第 IV 章 7 土橋。第 II 章は既刊の埋文事業団報告書の該当部分を参考に執筆した。編集は土橋が担当した。
- 19 各遺跡について『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』等に概要の報告がなされているが、本書の記述をもって正式な報告とする。上記年報等と本書に齟齬がある点は、本書の記述をとるものとする。
- 20 発掘調査から本書の作成に至るまで下記の方々から多大なご教示とご協力をいただいた。厚くお礼申しあげる（五十音順 敬称略）。
朝岡正康　諫山えりか　伊藤秀和　今井さやか　金子拓男　酒井和男　閑 雅之　田中久夫
立木宏明　藤塚 明　　波邊朋和

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査にいたる経緯	1
2 調査・整理作業の経過と体制	3
A 試掘・確認調査	3
B 本 調 査	4
C 整理作業	4

第Ⅱ章 周辺の環境

1 地理的環境	5
2 周辺の遺跡	6

第Ⅲ章 城所道下遺跡

1 試掘調査	8
2 調査の方法	8
A グリッド設定	8
B 調査の方法と経過	8
C 基本層序	10
3 遺構	11
4 遺物	12
5 まとめ	12

第Ⅳ章 武左衛門裏遺跡

1 試掘調査	13
A 試掘調査	13
B 武左衛門裏遺跡に係る調査履歴	13
2 調査の方法	14
A グリッドの設定	14
B 調査の方法と経過	14
3 基本層序	16
4 遺構	17
A 概要	17
B 遺構各説	17
5 遺物	19
A 概要	19
B 各説	19
6 武左衛門裏遺跡のプラント・オパール	20
A はじめに	20

B 試料と分析方法	20
C 分析結果	20
D 稲作について	23
E 遺構覆土について	23
7 まとめ	23
《要 約》	25
《引用・参考文献》	26
《観察表》	27
武左衛門裏遺跡 土器観察表	27
武左衛門裏遺跡 石器・土製品・金属製品観察表	28
武左衛門裏遺跡 遺構観察表	28

挿図目次

第 1 図 亀田バイパス平面図	1
第 2 図 遺跡の位置と範囲	2
第 3 図 調査トレース位置図	2
第 4 図 蒲原平野の地形と主要遺跡	5
第 5 図 近世初頭の越後平野の河川と江戸時代に開削された放水路	6
第 6 図 周辺の遺跡一覧	7
第 7 図 城所道下遺跡 グリッド設定図	9
第 8 図 武左衛門裏遺跡 グリッド設定図	15
第 9 図 武左衛門裏遺跡 IV層出土遺物分布図	19
第 10 図 基本土層のプランツ・オバール分布図	21
第 11 図 遺構覆土のプランツ・オバール分布図	21
第 12 図 武左衛門裏遺跡のプランツ・オバール	22

表目次

第 1 表 試料 1g当たりのプランツ・オバール個数	21
----------------------------	----

図版目次

【図面図版】

図版 1 城所道下遺跡 全体図・基本順序・出土遺物
図版 2 武左衛門裏遺跡 遺構全体図
図版 3 武左衛門裏遺跡 遺構分割図 (1) A区
図版 4 武左衛門裏遺跡 遺構分割図 (2) B区
図版 5 武左衛門裏遺跡 土層堆積状況図
図版 6 武左衛門裏遺跡 遺構個別図 SK6・7・9・14~16, SX1・3・10・11・19
図版 7 武左衛門裏遺跡 出土遺物

【写真図版】

図版 8 城所道下遺跡 完掘
図版 9 城所道下遺跡 土層堆積状況
図版 10 武左衛門裏遺跡 完掘
図版 11 武左衛門裏遺跡 土層堆積状況 SX1・3・10・11, SK6・7・9, SD5・13
図版 12 武左衛門裏遺跡 SK6・7・9・14・15
図版 13 武左衛門裏遺跡 SK16, SX1・3・11
図版 14 武左衛門裏遺跡 SD5・12・13, SX10・11・19
図版 15 城所道下遺跡、武左衛門裏遺跡 出土遺物

第Ⅰ章 序 説

1 調査にいたる経緯

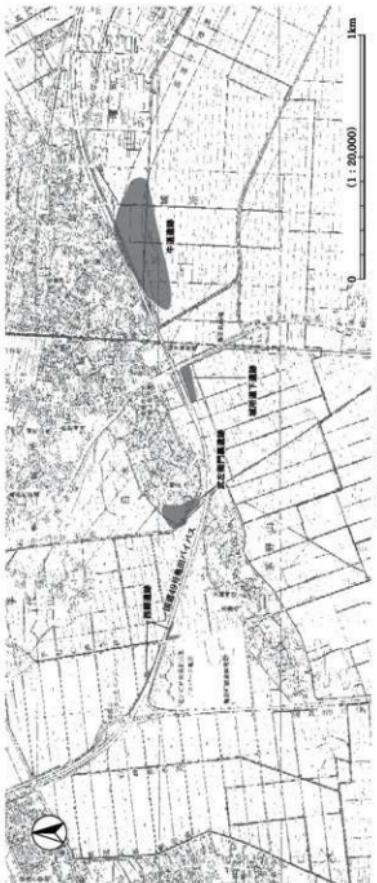
一般国道49号（福島県いわき市～新潟県新潟市）は本州を横断する主要幹線であるとともに、沿線市町村と新潟市を結ぶ幹線道路として重要な役割を果たしている。近年の経済成長に伴い自動車交通量は増加の一途をたどっており、亀田バイパスでは交通渋滞・交通事故・降雪時の交通障害などの交通環境の悪化が深刻な問題となってきた。これらの問題を解消するため、平成20年度の供用を目指して亀田バイパス（新潟市茅野山～城所）拡幅4車線化が計画された。

県教委は国土交通省新潟国道事務所の依頼を受けて拡幅予定地の分布調査を平成15年度に実施した。その結果、3か所で遺物を採集した。法線の近隣に周知の遺跡が多数存在することから、全線について試掘調査が必要であると国土交通省に報告した。

試掘調査は県教委の依頼を受けて、埋文事業団が平成16・17年度に実施した。平成16年度は12,000m²を対象に47か所（822m²）のトレンチを設定して調査した。その結果、茅野山地区の25トレンチ（図中ではTrと略す）で地表下3.3mから弥生時代前期の土器が出土した。城所地区の1・2・5・10トレンチでは古代の土師器・須恵器が出土し、4・5トレンチでは遺構が検出された。それぞれ周知の遺跡の範囲内ではなかったので「西郷遺跡」・「城所道下遺跡」として県の遺跡台帳に登録した。そして、西郷遺跡・城所道下遺跡については未調査部分の試掘調査後に取り扱いを決定するが、それ以外の調査対象地は本調査の必要はないとの県教委に報告した（平成17年2月9日付新埋第217号）。17年度は2回の試掘調査を実施した。4月の調査では茅野山地区の25・26トレンチで上面（古代）・下面（弥生時代）の遺物包含層が確認され、西郷遺跡の範囲が広がると考えられた。11トレンチでは古墳時代の土師器が出土し、



第1図 亀田バイパス平面図 [原図：国土交通省作成 亀田バイパス平面図]



第2図 道路の位置と範囲
[原図: 1:10,000新潟市全図] [遠赤測量は新潟県道路地籍(平成19年1月現在)による。]



第3図 調査トレンチ位置図 (2006年4月現在)

[原図: 国土交通省作図 法規図]

周知の武左衛門裏遺跡の範囲が広がることが明らかとなった。このため、西郷遺跡（1,050m²×2面）・武左衛門裏遺跡（800m²）については本調査が必要であると報告した（平成17年6月15日付新埋第86号）。8月の調査では城所地区の残り部分の調査を実施したが、遺構・遺物が検出されず、当該部分の本発掘調査は不要であると報告した（平成17年9月9日付新埋第158号）。

上記の結果をもって、平成18年3月31日付教文第1555号の2により、県教委から埋文事業団あてに城所道下遺跡・武左衛門裏遺跡・西郷遺跡の本発掘調査の依頼がなされた。

2 調査・整理作業の経過と体制

A 試掘・確認調査

（1）平成16年度

平成16年度の試掘・確認調査は、10月4～21日の実質10日間に、茅野山・城所地区の12,000m²を対象に行った。調査面積は822m²（トレンチ52か所 試掘率6.9%）である。

茅野山西郷地区（法線杭STA No.70～80付近）においては国道49号の北側に設定した25トレンチの地表下3.3mで弥生時代前期の土器が出土したが、周知の遺跡の範囲内ではなかったので「西郷遺跡」として県の遺跡台帳に登録した。茅野山竹ノ花地区（STA No.49～63付近）では遺跡は発見されなかった。城所道下地区（STA No.10～18付近）では古代の遺跡が発見されたため、「城所道下遺跡」として県の遺跡台帳に登録した。西郷遺跡・城所道下遺跡の本発掘調査の要否は次年度に行う試掘・確認調査の結果と合わせて判断することとした。

調査体制は以下の通りである。

平成16年度

調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板屋越 錦一）
調査	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理	黒井 幸一（事務局長） 長谷川二三夫（総務課長）
庶務	高野 正司（総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（調査課長）
担当	山本 雄（調査課試掘・確認担当課長代理）
職員	田中 一穂（調査課嘱託員）

（2）平成17年度

平成17年度の試掘・確認調査は4月11～26日と8月25日の実質13日間に、前者は15,250m²、後者は525m²を対象として行った。実質調査面積はそれぞれ1,355m²（トレンチ36か所 試掘率8.9%）、40m²（トレンチ2か所 試掘率7.5%）である。

調査の結果、STA No.10～16付近の国道49号南側にある城所道下遺跡2,660m²、STA No.39～41付近の国道49号北側にある武左衛門裏遺跡の拡張範囲800m²、STA No.64～67付近の国道49号南側にある西郷遺跡2,100m²（平面積1,050m²×2層）について本調査をする必要がある、ということになった。

調査体制は以下の通りである。

平成17年度

調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理	波多 俊二（事務局長） 長谷川二三夫（総務課長）
庶務	長谷川 靖（総務課班長）
調査統括	藤巻 正信（調査課長）
調査指導	寺崎 裕助（調査課試掘・確認担当課長代理）
担当	滝沢 規朗（調査課班長）
職員	齊藤 準（調査課嘱託員）

B 本 調 査

調査経過については各遺跡の報告部分に詳述する。調査体制は以下の通り。

平成18年度

調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理	波多 俊二（事務局長） 齊藤 栄（総務課長）
庶務	長谷川 靖（総務課班長）
調査統括	藤巻 正信（調査課長）
調査指導	寺崎 裕助（本調査担当課長代理）
担当	土橋 由理子（調査課班長）
職員	河崎 昭一（調査課主任調査員）
支援業者	株式会社 野上建設興業
現場代理人	小熊 哲介（埋文調査部）
調査員	石垣 義則（埋文調査部調査員）
	大谷 祐司（埋文調査部調査員）

C 整理作業

整理作業は調査期間中の降雨で作業を休止した時に遺構図面の整理、遺物の接合・実測・写真撮影を進め、冬期に編集を行った。整理体制は本調査と同様である。

作業は接合・実測を株式会社野上建設興業の作業員、トレイスを埋文事業団嘱託員（和泉裕子、小山たか子）が行った。

第Ⅱ章 周辺の環境

1 地理的環境

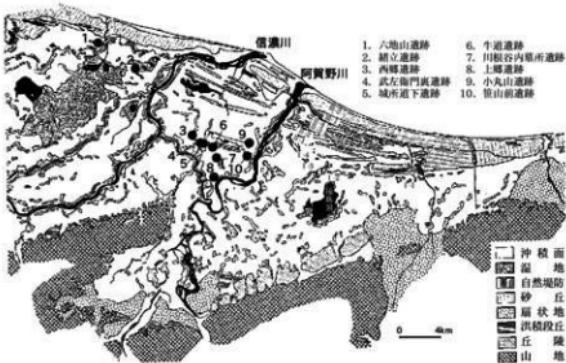
新潟県は日本海に臨む南北約250kmに及ぶ海岸線を有し、そこには日本有数の河川である信濃川・阿賀野川が河口を開いている。この2大河川を中心とする、西を西山丘陵と角田・弥彦山地、北を朝日・飯豊・越後山地、東を東山丘陵・新津丘陵・笛神丘陵・五頭連邦・柳形山脈に囲まれた南北約100km、東西10~25km、面積2,070km²の部分が越後平野である。越後平野は信濃川・阿賀野川の運搬する土砂で埋め立てられてきた三角州平野を主とする氾濫原の沖積平野であり、平野の西側には海岸線に平行して砂丘列が並んでいる。この砂丘列を新潟砂丘と呼ぶ〔新潟古砂丘グループ1974〕。

新潟砂丘は角田山麓から三面川河口までの海岸沿いに発達する。砂丘の地形・腐植層の発達と種類・立地する遺跡の時代などをもとに、内陸側から新砂丘I・新砂丘II・新砂丘IIIの3群に分類され、それぞれ内陸側から順に枝番号が付されている。形成時期は新砂丘Iが縄文時代前期末葉～中期以前、新砂丘IIが古墳時代以前、新砂丘III-Iが室町以前、III-IIが室町以降であると考えられている〔田中ほか1996〕(第4図)。

信濃川・阿賀野川の運搬する土砂によって形成された新潟砂丘であるが、砂丘によって河川の流路自体も規定されてきた。とくに阿賀野川は新砂丘IIIの形成に伴い河口をふさがれた後は松ヶ崎から西に向かって流れ、信濃川に合流するようになった〔新潟市史編さん自然部会1991〕(第5図)。

また砂丘の存在は河川の流路を規定するに留まらず、内陸部からの排水を困難なものとし、内部に淡水性の潟湖を多数形成するとともに、毎年のように洪水を引き起こしてきた。そのため、近世に入ると治水のために放水路の建設が進められるようになった。

享保6(1721)年に紫雲寺湯から直接排水する落堀川が開削されたが、飛砂のため機能を失った。そこで享保15(1730)年、排水量を調節するための堰をもつ松ヶ崎放水路が開削された。ところが享保16年



第4図 蒲原平野の地形と主要遺跡〔田中ほか1996〕を一部改変

の融雪洪水で堰が破壊され、松ヶ崎放水路は幅が54mから270mに拡大し、阿賀野川の本流と化してしまった。また、翌年落堀川も融雪洪水で押し切られ、これ以後越後平野の水害は減少し、干陸化が進んだ。そのため越後平野の各所で水害の回避・湿田の乾田化を目指した放水路の開削が計画・実行されるようになり、1931年の大河津分水の完成まで続けられたのである〔大熊1996〕。

さて、今回調査した城所道下遺跡・武左衛門裏遺跡は新潟砂丘後背湿地のほぼ中央の亀田郷に位置する。当地域は西を信濃川、東を阿賀野川、北を新潟砂丘に囲まれた低湿地である。このような地理的条件により、大河津分水の開削、栗ノ木排水機の新設(1948年)、耕地整理の完了(1956年)などの一連の治水事業が終わるまでは水害常襲地帯であった。しかも、低湿地であるため排水が困難で、水田の多くは常時溝田であり、「葦沼」「地図にない湖」と称されていた。この「葦沼」も松ヶ崎放水路完成後の18世紀後半以降開拓が本格化したと考えられ、それまでは微高地が開発対象とされていたと推察されている〔五十嵐1996〕。

治水事業が完了した現在、亀田郷にみられる地形は新潟砂丘や自然堤防に由来する微高地、旧河道・氾濫原に由来する低湿地があり、微高地は集落・畠・果樹園、低湿地は水田に利用されている。阿賀野川水害地形分類図〔大矢・加藤1984〕で城所道下遺跡と武左衛門裏遺跡の立地を見ると、城所道下遺跡は後背湿地、武左衛門裏遺跡は砂丘間を南東から北西に抜ける旧河道に位置しており、両者ともに洪水時には水がつく場所にあたる。

2 周辺の遺跡

縄文時代 亀田郷最古の縄文時代前期前葉の土器が出土した笛山前遺跡〔新潟市教育委員会1996〕や中期初頭の撲点的集落である砂崩遺跡〔亀田町史編さん委員会1988〕、後期前葉の上の山遺跡、晚期中葉から後葉の前郷遺跡など、各期を通して新砂丘1上に立地する。晚期後半になると上田遺跡のように低湿地に進出する遺跡も現れる〔酒井2000〕。

弥生時代 中期後半の玉作り関係の遺物を出土する小丸山遺跡〔家田1986〕、前郷遺跡〔亀田町史編さん委員会前掲〕・山ン家遺跡〔川上1993〕・上の山遺跡〔田村1950〕が阿賀野川左岸から約2kmの砂丘上に近接して立地する。これらの遺跡は、連鎖的に1つの大きな玉作り集落を構成していたと考えられ、主に佐渡から搬入された玉の原石（主に緑色凝灰岩）は、他地域への供給を前提として加工された可能性が高いと考えられている〔酒井前掲〕。

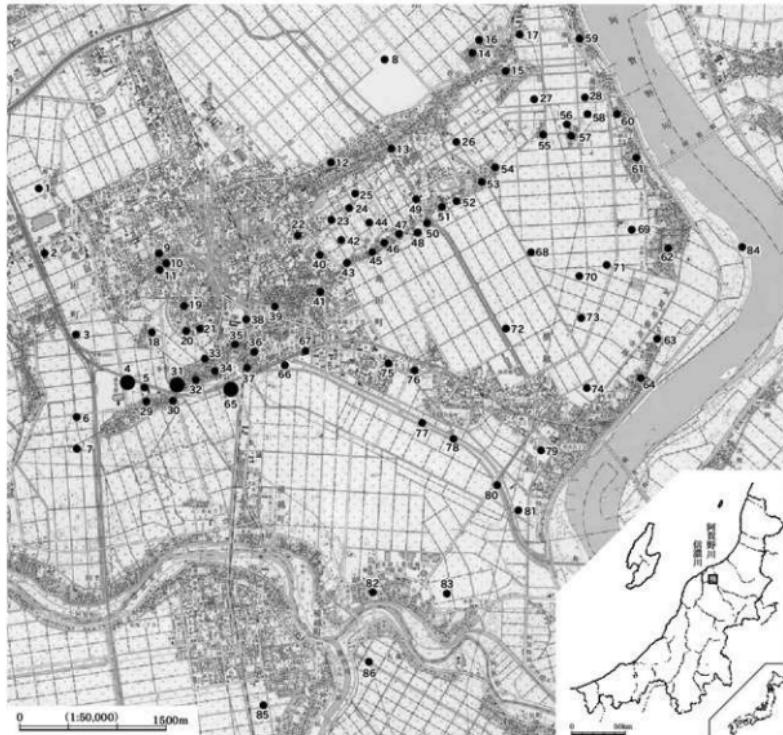
古墳時代 新潟砂丘では前期の集落遺跡が圧倒的に多く、中期後半から後期のものは少ない。砂丘上に立地する武左衛門裏遺跡では表面採集品ながら多数の土師器や炭化物が出土する地点があるので、住居跡がある可能性が指摘されている〔新潟県埋蔵文化財包蔵地カード1973〕。同じ砂丘上の笛山前遺跡では住居跡・土塙墓が検出されている〔新潟市教育委員会前掲〕。

古代 亀田郷においては砂丘上に小丸山遺跡〔新潟市史編さん原始古代中世部会1994・川村1989〕、荒木前遺跡〔渡辺1991・川上1996〕、中の山遺跡〔川上1982〕などの集落が形成された。自然堤防には畠跡が検出された牛道遺跡〔立木（土橋）ほか1999〕・川根谷内墓所遺跡〔江口2001〕などがあり、後背湿地には水田跡・畠跡が検出された上郷遺跡〔上野・春日1997〕などがある。居住には洪水被害を避けられる高台、耕作には水の便が良い低地というように、地の利を生かしていたことがわかる。



第5図 近世初頭の越後平野の河川と江戸時代に開削された放水路
〔大熊1996〕を転載

中世 考古資料的側面からみれば、亀田郷一帯ではほとんどの遺跡が14世紀以降に成立する〔酒井前掲〕。荒木前遺跡は舶載陶器などの出土から在地領主の居住地であると想定される〔渡辺前掲・川上前掲〕。三王山遺跡は堅穴状遺構・柱列・小鍛冶跡が検出されており、やはり高い地位の人の住居跡と考えられている〔酒井1980〕。



№	遺跡名	時代	№	遺跡名	時代	№	遺跡名	時代	№	遺跡名	時代
1	鶴久子	平	18	千代山	縄	35	亀田山B	唐・室・江	53	上山	平
2	下西	古墳	19	貝塚	古代	36	青地山	縄・孫・古代	54	山	平・縄
3	北高	平	20	中の山	古代	37	亀田山A	縄・孫・古代	55	平山	平
4	東高	孫	21	荒木前	縄	38	山王山	室	56	御門社遺	平
5	大坂	古代	22	御津山	縄	39	長谷	古墳	57	御山前	孫・古墳
6	平山前	縄	23	御津山	古墳	40	尾山	古代	58	城山	古代
7	西山郷	縄・古墳	24	金輪山	縄・古代	41	砂河	古代	59	山	縄・古墳・平
8	東里	縄・孫・古墳	25	七丈山	古代	42	二條山	古代	60	山	上山
9	赤堀山	平・縄	26	乳荷舟	古代	43	砂山上ノ山	古代	61	御野B	平
10	西高	平・縄	27	松山山	平	44	須ノ山	平	62	御野C	平
11	風山	古代	28	中山	縄・古墳・古代	45	砂根山	縄・平・江	63	御野寺	平
12	北山	平	29	真南山	縄・孫・古墳・平	46	砂根山	縄・古代	64	下郷	平
13	丸山	平	30	八幡山	孫・平	47	道山	縄・孫・室	65	上郷	古代
14	小山	縄・古墳・平	31	武太橋門裏	縄・古墳	48	荷舟	縄・孫・古代	66	御野D	平
15	和山	平・古墳	32	日本前	縄・孫・平	49	御野山	平	67	御田	古代
16	東引山B	平	33	日本前	古代	50	山ノ山	孫・古代	68	平	平
17	東引山A	平	34	日本前	縄・孫・古墳	51	御込山	古代	69	御田	古墳
						52	御込山少山	縄・孫・古代	70	御田A	平・室
						53	御込山少山	縄・孫・古代	71	山のハサバ	古代
						54	御門山	平	72	御門山	平
						55	御門社遺	平	73	御門山	古代
						56	御門山前	孫・古墳	74	御門山	古代
						57	御山前	古代	75	御門山	古代
						58	城山	古代	76	御門山	古代
						59	山	縄・古墳・平	77	御門山御前山	平・室
						60	山	上山	78	上郷C	平
						61	御野B	平	79	御野御跡	室
						62	御野寺	平	80	上郷	古代
						63	下郷	平	81	上郷B	古代
						64	下郷御跡	平	82	内浦山古伝	室
						65	御野御跡	平	83	御野御跡	平
						66	平	84	小村御跡	古墳	
						67	御田	古代	85	新潟島	古墳・平
						68	江戸	平	86	中谷内	平・室

第6図 周辺の遺跡一覧

(原図：国土地理院1:25,000「新津」「水原」「新潟南部」白根」平成13年。遺跡は新潟県遺跡台帳（平成19年1月現在）による)

第III章 城所道下遺跡

1 試掘調査（第3図）

試掘調査は平成16年10月4～21日に亀田バイパス関係の一連の試掘調査のなかで行った。

城所道下遺跡に係る調査範囲は国交省法線杭STA.No.10～32付近の国道49号の拡幅予定地である。前述した調査範囲のうちSTA.No.10～18付近（1～8トレンチ間）で古代の包含層が確認された。1・2・5トレンチの黒褐色粘土質（包含層）から土師器片が出土し、2トレンチではほかのトレンチより多く9点が出土した。また、4トレンチでは土坑・ピット各1基、5トレンチでは溝状遺構1条を包含層直下で検出した。遺構から遺物は出土していない。試掘調査の結果、古代の遺物が出土し、遺構も確認されたため、本発掘調査をする必要があると判断した（平成17年2月9日付け新埋第217号）。なお、本発掘調査対象地点を新遺跡「城所道下（じょうしょみちした）遺跡」として県の遺跡台帳に登録した。国道49号を挟んで北側については平成17年4月11日～26日、8月25日に試掘調査を実施したが、3トレンチで土師器が1点出土したほかは、遺構・遺物とも検出されなかった。このため、遺跡は拡大せず、本発掘調査の必要なしとした（平成17年6月15日付け新埋第86号、平成17年9月9日付け新埋第158号）。

2 調査の方法（第7図）

A グリッド設定

グリッドは本発掘調査区の任意の点を基点に、調査区の北辺に平行して東西方向の軸を設定し、これに直行する方向を南北方向の軸とした。10m方眼の大グリッドを組むこととし、グリッド表示杭は各グリッドの北西隅に打設した。グリッド名の表記や呼称については武左衛門裏遺跡に倣った。

杭	世界測地系（日本測地系2000） 第Ⅳ系
4B	X = 206217.52, Y = 53653.579 緯度 37° 51' 24.5473"、経度 139° 06' 35.0546"
	真北方向角 -0° 22' 27"
10B	X = 206237.73, Y = 53710.066 緯度 37° 51' 25.1908"、経度 139° 06' 37.3708"
	真北方向角 -0° 22' 29"

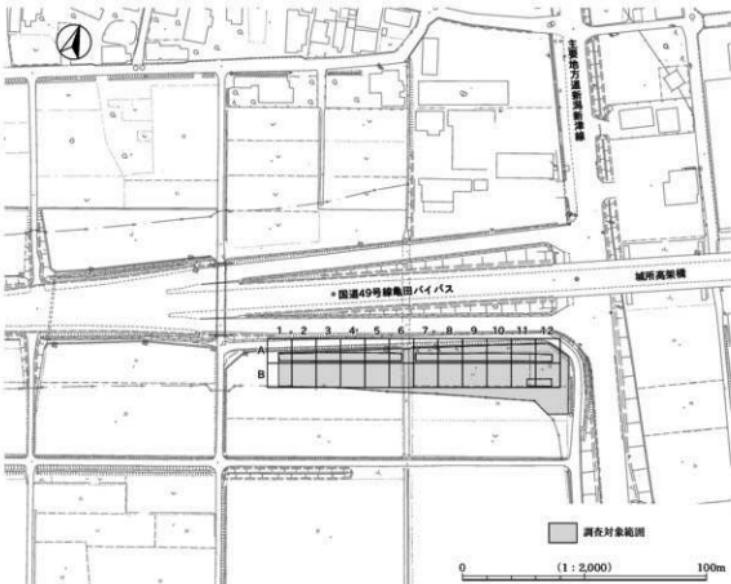
B 調査の方法と経過

試掘調査の結果、遺構・遺物の遺存状態があまり良好でないことが予想された。このため、全面調査に先立ち、試掘トレンチが設定されなかった対象地北半分についてトレンチ調査を行い、その結果をみて、全体の調査方針を定めることにした。

表土掘削 表土掘削は0.25m³級のバックホー1台で行った。5月22日にトレンチ（幅約3m）を設定し、その西側から表土掘削に着手した。はじめに、1m四方の土層観察トレンチを約20mおきに4か所掘削し、試掘調査で把握された遺物包含層とされる層位（IV層）の堆積状況を確認した。続いて、IV層上

面までを目安に表土掘削に着手したが、IV層上面に掘削が及んでも、近世以降の陶磁器以外はほとんど遺物が出土しなかった。このため、遺物が出土しない場合は、包含層相当層のIV層もバックホーで掘削することにした。IV層の存在は確認できるものの遺物の出土は非常に少なく、V層上面まで掘削する作業が東側に向かって続行された。5月23日にはトレーナー西半分の掘削が終了し、5月25日には一部追加部分(11・12Bグリッド付近)を含めた範囲の掘削が終了した。なお、11・12Bグリッドについては遺物・遺構がないことを確認してすぐに埋め戻した。この間に出土した遺物は、9Aグリッド付近で出土した土師器碗の底部片2点(うち1点を報告図版1-No.4)のほか、近世・近現代の陶磁器16点、砥石2点の計20点であった。遺物はII~IV層で出土し、古代の包含層と考えられるIV層から土師器片に混じって、近世以降の陶磁器も出土した。また、この時点で遺構は見られなかった。調査の結果、包含層とみなされる層からの遺物の出土数が極めて少なく、遺物の時期も古代や近世が混在しており、厳密な意味での包含層とは言い難いこと、かなり広範囲にわたって遺構確認面を観察したものの遺構が検出されなかつたことから、調査対象地に遺跡が良好な状態で残っている可能性が低いことが明らかとなつた。前年度までの試掘調査の結果でも出土遺物は少なく、遺構とされたものについても、今回の広範囲にわたる遺構確認面の観察結果に照らし自然地形の凹凸部分と捉えるのが妥当と考えられた。このため、調査を行っていない南半分についても遺跡の遺存状況が良好とは考え難く、面的な調査は表土掘削を行った範囲のみとした。

遺構精査 5月26日~30日で開発掘削と土層観察を行い、遺跡全体の土層の堆積を確認した。5月29日には文化行政課尾崎主任調査員から、現在調査している範囲について遺構精査を行い、遺構が検出されなければこれ以上範囲を広げて調査をする必要がないとの現地指導を受けた。5月31日~6月1日



第7図 城所道下遺跡 グリッド設定図 [原図：国土交通省著成 法線図]

に遺構精査を行ったところ、須恵器片や近世陶磁器、寛永通宝がわずかに出土したが、遺構の検出はみられない状況であった。そのため、遺構精査を終了し、全体写真のための準備・清掃及び全体写真撮影、記録作業を経て発掘調査は終了した。6月6日の文化行政課による終了確認後、6月9日に国交省に引き渡した。

C 基本層序(図版1・9)

本遺跡は新砂丘Iの内陸側に形成された後背湿地に位置し、発掘調査直前まで水田として利用されている場所である。表土・地山を含め大きく分けてI～VI層に区分し、III～V層はさらに細分した。

基本層序は試掘調査で設定されたものを参考にして、以下の通りに設定した。

- I 層：暗灰色土(2.5Y4/2)。調査区全域で確認でき、層厚は10～30cmである。現表土。
- II 層：灰色粘土(5Y6/1)。植物の根に沈着した鉄分に由来する明褐色土(以下、明褐色土)(7.5YR5/6)が筋状・斑状に多量含まれる。粘性やや強、しまり強。一部、I層の土が混入する。
- III 層：褐灰色粘土(10YR6/1)。明褐色土(7.5YR5/6)が筋状・斑状に多量含まれる。粘性やや強、しまり強。近現代の陶磁器を含む。一部、II層の土が混入する。
- III' 層：III層の土にVe層の土が部分的に含まれる。9Aグリッドの一部でのみ確認できる。
- IV 層：試掘調査で包含層と捉えられていた層である。場所によって色調・土質等が異なるため、以下のように細分した。
 - IVa層：黄灰色シルト混じり粘土(2.5Y4/1)。明褐色土(7.5YR5/6)が斑状に少量含まれる。粘性やや強、しまりやや弱。5Aグリッド以東で確認でき、6Aグリッド付近ではVb層に近い部分が粘性強い。9・10Aグリッド付近のIVa層下部(Ve層に近い部分)から土師器片・須恵器片が出土。
 - IVb層：灰色粘土(5Y4/1)。明褐色土(7.5YR5/6)が斑状に少量含まれる。粘性強、しまりやや強。4・5Aグリッド付近で須恵器、近世以降の陶磁器、寛永通宝が出土。
 - IVc層：灰色粘土(7.5Y4/1)。明褐色土(7.5YR5/6)が斑状に少量含まれる。粘性・しまりやや強。4Aグリッドから西側に向かって不安定(波状)に堆積する。IVc層の上下層も一部でこのような堆積が見られる。
 - IVc'層：黒褐色粘土(2.5Y3/1)と灰色シルト混じり粘土(5Y5/1)がマーブル状に堆積する。明褐色土(7.5YR5/6)が斑状に微量含まれる。粘性・しまりやや強。4Aグリッドの一部でのみ確認できる。
 - IVd層：黄灰色粘土(2.5Y4/1)。明褐色土(7.5YR5/6)が斑状に微量含まれる。植物遺体(細長い根)が少量含まれる。粘性強、しまりやや弱。1Aグリッドのみで確認できる。
 - IVe層：黒褐色粘土(2.5Y3/1)。明褐色土(7.5YR5/6)が斑状に少量含まれる。植物遺体(細長い根)が少量含まれる。粘性やや強、しまりやや弱。1および2Aグリッドの西側で確認できる。
- V 層：試掘調査で一部のトレンチで遺構確認面とされる層。場所によって色調・土質等が異なるため、以下のように細分した。
 - Va層：灰色シルト(N7/)。黒褐色粘土(2.5Y3/1)、黄灰色粘土(2.5Y4/1)が径20～40mmのブロック状に含まれる。粘性やや強、しまりやや弱。5Aグリッドで確認できる。
 - Vb層：青灰色シルト混じり粘土(10BG5/1)。明褐色土(7.5YR5/6)が斑状に少量含まれる。黒褐色土(7.5YR5/6)が斑状に少量含まれる。

色粘土（2.5Y3/1）・黄灰色粘土（2.5YR4/1）が径20～50mmのブロック状に含まれる。粘性やや強、しまりやや弱。8Aグリッド付近で植物の茎・根が残る。

Vc層：青灰色（砂質）シルト（10BG6/1）。明褐色土（7.5YR5/6）が斑状に少量含まれる。黄灰色粘土（2.5Y4/1）が径20mm前後のブロック状に含まれる。粘性・しまりやや弱。5Aグリッドで確認でき、西側に向かって砂っぽくなる。

Vd層：灰色シルト（5Y6/1）。明褐色土（7.5YR5/6）が斑状に微量含まれる。黄灰色粘土（2.5Y4/1）が径20～40mmのブロック状に含まれる。粘性やや強、しまりやや弱。11・12Aグリッドで確認でき、11Aグリッドから東に向かって堆積が厚くなる。遺構確認面。

Ve層：灰黄色シルト（2.5Y6/2）。明褐色土（7.5YR5/6）が細かく斑状に多量含まれる。黄灰色粘土（2.5Y4/1）が径20～40mmのブロック状に含まれる。粘性・しまりやや強。8～10Aグリッドで確認できる。9・10Aグリッドではこの上面を遺構確認面とした。

VI層：青灰色砂（5BG5/1）。4・5Aグリッドで部分的にVb層の土が含まれる。粘性非常に弱、しまり弱。湧水が見られる。1～8グリッドではこの層の上面を遺構確認面とした。

上記層序のうち、I～III層は現水田に由来する層である。IV層からは土師器片や須恵器片が出土し、試掘結果同様に遺物包含層と考えられるが、同層から近世以降の陶磁器も出土したことから、純粋な古代の包含層として捉えることは難しい。

5グリッドから西に向かってIII・IV・V層が波を打ったような不安定な堆積をしており、特にIVc・IVc'層で顕著である。発掘調査以前は水田として利用されていた為に、人為的な要因によって、そのような堆積をした可能性がある¹⁾。

遺構確認面は、試掘調査の際に土坑・溝状遺構などが検出されたV・VI層とした。ただし、調査区の西側と東側で堆積が異なるため、遺構確認面は1～8AグリッドではVI層、9・10AグリッドでVe層、11・12AグリッドでVd層となる。遺構確認面の地形は部分的に起伏が見られ、調査区西側は標高0.7mと低く、東に向かって徐々に高くなり4～5Aグリッドで標高0.9mと一旦安定するものの、6・7Aグリッドで低くなり、東に向かってもう一度高くなり9Aグリッドより東側ではおよそ標高1.0mで安定した地形となる。6・7グリッドの低地中央には現在使用中の排水路が調査区を横断するように敷設されている。地元の人の話によれば、この排水路は昭和20年頃にはすでに使われていたということで、元来低地だった地形を生かして排水路を掘削していたことがわかる。

3 遺構（図版1・8）

遺物包含層（IV層）を掘削後に、V・VI層上面において遺構精査を行ったが遺構は検出されなかった。開渠で掘削したサブトレーンチ断面の上層堆積からも遺構の落ち込みを示すような覆土の堆積や混入は見られなかった。古代の遺物が僅かに出土した9Aグリッドより東側は標高1.0m前後とほかの場所より高く、比較的水はけがよく安定している地形であったが、遺構は検出されなかった。また、4Aグリッド付近でIVb層の土の落ち込みのような範囲が見られたが、堆積の状況から自然地形による落ち込みと判断した。

1) 高瀬信行氏によれば、このような堆積は液状化等による自然現象で形成された可能性があるという。

4 遺 物 (図版: 1・15)

表土掘削及び包含層掘削で出土した遺物には須恵器3点、土師器5点、寛永通宝1点、砥石2点のほか近世・近現代の陶磁器がある。遺物は4・5Aグリッド付近と9・10Aグリッド付近で出土したが、出土した状況から遺構に伴うものではないと判断した。以下ではIV層で出土した遺物5点と、平成16年度試掘調査で出土した土師器1点を報告する。

1は須恵器の杯である。口径は推定12.6cmである。内外面ロクロナデで、ロクロの回転方向は不明。胎土は混入物が少なく精良である。焼成は良好。2は須恵器の（短頸）壺の高台部分と考えられる。底径は推定14.0cmである。内外面ロクロナデで、ロクロの回転方向は不明。胎土は混入物が少なく精良であるが、長石が少量混入している。焼成は良好。

3・4は土師器無台碗である。3は口径12.0cmである。内外面ロクロナデで、ロクロの回転方向は不明。全体的に磨耗しておりロクロ目は明瞭に残っていない。胎土は混入物が少なく精良であるが、径4mm程度の小礫を少量含んでいる。焼成はやや不良。4は底径4.4cmである。内外面ロクロナデで、ロクロの回転方向は不明。底部外面に糸切り痕が残る。胎土には径1mmの砂粒、石英、長石、角閃石が混入している。焼成はやや良い。

5は寛永通寶である。寛永通寶には様々に種類があり、材質、「寛」や「寶」の文字の違い、背面上部に描かかれている文字の有無や種類、製造時期等でいくつかに分類されている。一文銭の銅錢は、1～3期に分けられており、背面上部に「文」が描かれていることから、2期の寛永通寶で「文銭」と呼ばれるものである。製造時期は寛文8年(1668)～天和3年(1683)と考えられている〔永井1998〕。

6は土師器無台碗である。底径5.2cmである。内外面ロクロナデで、ロクロの回転方向は不明。全体的に磨耗しておりロクロ目は明瞭に残っていない。底部には成形時に付いたと思われる傷が2か所見られる。胎土には径1mmの砂粒、長石、角閃石が混入している。焼成はやや良い。

5 ま と め

試掘調査では古代の遺構と包含層が検出されたが本調査では、古代の遺物が出土したもの、人々の生活の痕跡を示す遺構は検出されなかった。古代の遺物である須恵器や土師器が出土したが、点数は少なく、また細片のため詳細な遺物の時期を提示することは困難である。さらに、遺構も検出されなかつたことから、この場所を古代の遺跡と積極的には言うことは難しいと考えられる。

城所道下遺跡周辺には古代の遺跡が点在し、半径約1kmの範囲内に牛道遺跡〔立木（土橋）ほか1999〕、中の山遺跡〔川上1982〕、荒木前遺跡〔渡辺1991・川上1996〕などの集落遺跡が分布する。これらの遺跡の発掘調査結果から、砂丘及び砂丘周辺で生活を営む古代の人々の行動が徐々に明らかとなっている。そのような状況の中で城所道下遺跡の発掘調査成果も期待されたが、残念ながら今回の調査結果ではそのようなことを明らかにすることは出来なかった。

第IV章 武左衛門裏遺跡

1 試掘調査

A 試掘調査

試掘調査は平成17年4月11～26日に亀田バイパス関係の一連の試掘調査のなかで行った。調査は、調査対象地にトレーンチを任意に設定して重機および人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認し、土層の堆積状況、トレーンチ位置、遺構・遺物の検出状況を写真・図面等に記録する方法で行った。掘削深度は盛土除去後3mを目途としたが、湧水等によりトレーンチ壁が崩落する危険があったため、2m前後の地点もある。

武左衛門裏遺跡に係る調査範囲は国交省法線杭STA. No.25～60付近の国道49号の拡幅予定地と、国道からの排水を溜めておくための貯水池の予定地である。国道北側の貯水池予定地に設定した11トレーンチではⅢb層（暗灰褐色シルト層）から縄文時代後期の土器片3点、弥生時代中期の土器片1点、須恵器1点、古墳時代・古代の土師器多数と近世陶器1点が出土した。このため、11トレーンチ周辺を近接する武左衛門裏遺跡の拡張範囲と捉え、本発掘調査をする必要があると判断した。国道北側の拡幅予定地に設定した6トレーンチでは土師器2点、陶磁器5点が出土した。6トレーンチの東側は農作物が作付けされており試掘調査ができなかったが、遺物が出土した6トレーンチと11トレーンチの間の土地であるのでやはり武左衛門裏遺跡として本調査範囲に含めることとした。なお、国道南側に設定した27トレーンチでは土師器が出土したが、隣接する未買収地の試掘調査の結果を待って本発掘調査の要否を判断することとした（平成17年6月15日付け新埋第86号）。

よって、平成18年度は国道北側の拡幅部分と貯水池部分の本調査を実施することになった。

B 武左衛門裏遺跡に係る調査履歴

武左衛門裏遺跡の文献初出は昭和34年に刊行された『亀田町史』【小林1959】である。ここではまだ武左衛門裏遺跡という遺跡名は使われていないが、表面採集の結果、「日水の清水武左衛門氏竹蔽」で「弥生・土師・須恵とづいて出土しているので、かなり長期間人間生活がいとなまれたところと思われる」と紹介されている。

平成2年に刊行された『亀田の歴史』【酒井1990】には、日水地区の遺跡として清水武左衛門氏竹蔽のほかに、2か所の遺跡が紹介されている。そのうちのひとつ、手代山排水路遺跡は武左衛門裏遺跡に近接する。手代山排水路遺跡は昭和39年5月の手城山排水路（現二木本排水路）掘削の上げ土から単節斜縫文と沈線文が施された土器2点が出土したことにより発見された。この土器については上原甲子郎氏が猫山式土器のようだと評価を下した。その後、表面採集調査・ボーリング調査を行い、この付近一帯に同種の土器が分布していることが明らかとなった。

昭和48年には県教委による分布調査で古墳時代の遺物が採集され、県の遺跡台帳に登録・周知された。昭和60年の分布調査では現状変更は認められなかったものの、遺物は採集されなかった。

平成15年10月29日～16年3月8日には「公共下水道中部枝線管渠第7・9工区（日水）」を調査原因

2 調査の方法

として亀田町教育委員会が工事立会を行った。その結果、武左衛門裏遺跡の南東約60mにある集落周道路にある工区では路面から2mほど下がったところで粗砂と共に流木が多数見つかり、かつては流路であったことがうかがわれた。遺跡の東側約150mにある砂丘上の集落内の工区では包含層からまとまつた遺物の出土がみられたため、ここを新遺跡「日水前遺跡」として登録した。

平成17年10月11・12日には「下水道敷設」を調査原因として新潟市教育委員会が本調査を行った。この時点では県教委が4月に実施した国道49号関係の試掘調査により武左衛門裏遺跡の範囲が拡大したことが周知されていなかったので、養海山遺跡隣接地として調査が行われた。本調査は国道49号の南側に位置する発進立坑と北側に位置する到達立坑について行い、開削部分は工事立会いで対応した。このうち到達立坑が本書で報告する武左衛門裏遺跡A地区の中央に位置する。到達立坑では現地表面から3mほど掘削したが、II層から近代の陶磁器が出土したほかは遺構・遺物は検出されなかった。このため遺跡の存在は確認されないと結論付けられた（平成17年10月24日付け新歴第541号の10）。

平成17年には前項で記述した通り、国道49号拡幅工事に伴う試掘調査が埋文事業団によって実施され、遺跡範囲が拡大することが明らかとなった。このため、周知の武左衛門裏遺跡を範囲拡大とともに、この範囲に取り込まれる形となる手城山排水路遺跡を抹消して武左衛門裏遺跡に含めることとして県の遺跡台帳の内容を変更した（平成17年11月1日付け教文第947号）。

2 調査の方法

A グリッドの設定（第8図）

グリッドは貯水池予定地の任意の点を基点に、調査区の北辺に平行して東西方向の軸を設定し、これに直行する方向を南北方向の軸とした。10m方眼を大グリッドとし、東西方向を西から算用数字の1・2・3…、南北方向を北からアルファベット大文字のA・B・C…とし、グリッド名は「1A」のように組み合わせて呼称した。グリッド表示杭は各グリッドの北西隅に打設した。小グリッドは大グリッドを2m方眼に分割し、北西隅から南東に向けて1・2・3…と番号を付し、「1A25」のように大グリッド名に続けて呼称した。

杭	世界測地系（日本測地系2000） 第Ⅷ系
3B	X = 206212.952, Y = 53166.207 緯度 37° 51' 25.2145", 経度 139° 06' 15.3816"
	真北方向角 -0° 22' 15"
5B	X = 206204.852, Y = 53184.495 緯度 37° 51' 24.9479", 経度 139° 06' 16.1277"
	真北方向角 -0° 22' 16"

B 調査の方法と経過

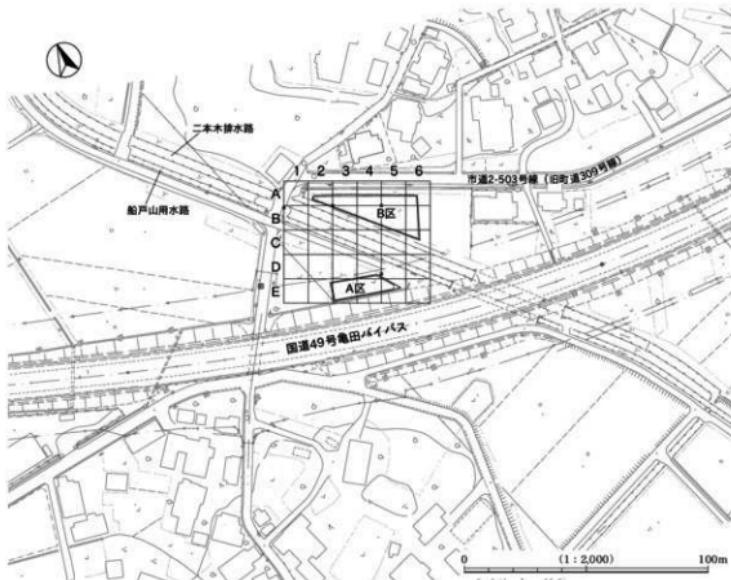
調査区が二本木排水路を挟み国道拡幅部分と貯水池部分に分かれていたため、前者を「A区」、後者を「B区」と呼称し調査を進めた。

表土掘削 表土掘削は0.25m³級のバックホー1台で行った。4月17日からA区の東側から表土掘削に着手したが、現地表面から60～80cmの深さの遺構確認面近くまで、現代のビニール・磁器・瓦等を含む搅乱層あるいは客土層であり、包含層と見られる層はほとんど残っていない状況であった。このため、調査員が精査しながら重機で確認面まで掘削することとした。調査区中ほどまで進んだところで深さ約

50cmのところから新鮮な埋め戻し砂が幅約1.5mの溝状に西へ向かって伸びていくのが検出された。ビンポールで検索すると中に埋設物があるようだったので国交省に確認すると、17年度に埋設した下水管があるとの回答が得られた。このため、新潟市役所亀田支所下水道課に立会いを求めた。立会いの結果、下水管を被覆している砂の厚さが50cm以下にならなければ、掘削に問題ないとのことだったので、埋め戻し砂の部分は避けて掘削を続けることにした。この下水管と到達立坑は平成17年10月に新潟市教育委員会が工事に伴い工事立会いおよび本調査を実施し、「遺跡なし」と報告した箇所であった。今回調査に入るにあたり、A区に下水道管が埋設されていることは国交省から知らされておらず、それに伴う発掘調査が行われていたことも埋文事業団は把握していなかった。

B区の表土掘削には4月20日に西側から着手した。A区と同様に遺構確認面まで水田床土とみられ、確認面に食い込む黒褐色シルトから近世陶磁器・ガラス・ビニール等が出土するような状況であった。このため、調査員が精査しながら遺構確認面までバックホーで掘削を進めた。ただし、4A・Bグリッドでは黒色土の落ち込みが見られたため重機での掘削は行わなかった。

遺構精査 4月24日から作業員を投入し、B区の排水溝を兼ねた土層観察溝を壁沿いに掘削した。4月26日から遺構精査を開始し、3Bグリッドで黒色土の入った浅い不整形な落ち込みを確認した。その後5月10日まで遺構精査を続け、数か所の不整形な浅い落ち込みや溝を検出した。5A・Bグリッドの黒色土の落ち込みは自然地形であるが1mほどの深さまで落ち込み、古代の土師器・須恵器などが少数出土した。A区は5月1・10日に遺構精査を行い、B区と同様の浅い落ち込みと溝を検出した。A・B区とも出土遺物が少なく、あっても細片のため、遺構の時期・性格を判断しがたい状況であった。



第8図 武左衛門裏遺跡 グリッド設定図

[原図：国土交通省作成 法線図]

3 基本層序 (図版5・11)

調査区は旧河道にあたり、洪水時にはここを洪水が走ると考えられている土地で〔大矢・加藤1984〕、発掘調査直前まで水田として利用されていた場所である。これに対して、旧来の武左衛門裏遺跡は調査区北側の新潟砂丘上に立地する。

基本層序は以下の通り。

- I 層：黒褐色土（2.5Y3/2）。植物の根に沈着した鉄分に由来する褐色土（7.5YR4/4）が網状に多く含まれる。粘性弱。しまり強。ビニール製品や近現代の陶磁器を含む。現水田面。
 - II 層：灰黄褐色砂質土（10YR4/2）。植物の根に沈着した鉄分に由来する褐色土（7.5YR4/4）が筋状に含まれる。粘性弱。しまり強。ビニール製品や近現代の陶磁器を含む。水田床土。褐色土の多寡で細分される。
 - II a層：褐色土多い。
 - II b層：褐色土少ない。
 - III 層：褐灰色粘土（10YR4/1）。植物の根に沈着した鉄分に由来する褐色土（7.5YR4/4）が斑状に含まれる。粘性・しまり強。古代の土師器細片や近現代の陶磁器を含む。水田床土。
 - IV 層：黒褐色粘土（10YR3/1）を基本とする。植物の根に沈着した鉄分に由来する褐色土（7.5YR4/4）が少量含まれる。粘性非常に強。しまり強。近世陶磁器、中世の珠洲焼・熙寧元寶、古代の土師器・須恵器、古墳時代の土師器、繩文土器等が含まれる。砂の混じり具合で細分される。
 - IV a層：全体に砂が少量混じる。比較的標高の高いB区北西側に堆積する。
 - IV b層：砂を含まない。B区東側に堆積する。
 - IV c層：黒色粘土（10YR1.7/1）。やや砂質。黄褐色砂を径1cm未満の斑状に含む。粘性強。しまり弱。
 - IV d層：黒色粘土（10YR1.7/1）。粘性強。しまり弱。
 - IV e層：暗灰黄色砂と黄灰色砂（2.5Y4/2と4/1）が混じる。黒褐色シルト質砂（2.5Y3/1）が層上部に筋状に堆積する。粘性・しまり弱。
 - IV f層：黄褐色～オリーブ褐色砂（2.5Y5/3～4/3）。黒褐色砂（2.5Y3/1）が混じる。粘性なし。しまりややあり。
 - IV g層：黒褐色砂（10YR2/1）に鈍い黄褐色砂（10YR4/3）が筋状に混じる。粘性なし・しまり弱。1cm角の木炭を疎らに含む。
 - V 層：灰色シルト質粘土（5Y5/1）。植物の根に沈着した鉄分に由来する褐色土（7.5YR4/4）が筋状に含まれる。粘性非常に強。しまり弱。遺構確認面。
 - V' 層：V層にIV層由来の黒褐色粘土が筋状に混じる。
 - V" 層：灰色粘土（7.5Y5/1）。粘性強。しまり弱。
 - V'''層：灰色シルト質粘土（7.5Y4/1）。粘性ややあり。しまり弱。自然木を含む。
 - VI 層：灰色砂（5Y5/1）。粘性・しまりなし。B区東側に堆積する。
- 確認面であるV層上面の地形は次の通りである。A区は標高約0.5mのほぼ平坦な地形を呈する。B区は5Bグリッド周辺が堆積状に低くなっている。最も低いところでは標高0.1mである。その周囲では標高

0.5～0.6mを測り、砂丘本体のある北西へ向かって緩やかに高くなっている。

上記層序のうち、I～Ⅲ層は現水田に由来する層で、I～Ⅲ層へ下るに従い植物由来の鉄分の沈着が減少する。Ⅳ層が遺物包含層であるが、縄文時代から近世までの遺物が含まれており、厳密には包含層とは見做し難い。近世以前に流れ込んで形成された層であると考えられる。Ⅳa層はB区北西側の地形的に若干高い所に堆積し、Ⅳb層は東側の低い所に堆積する。特にⅣc～Ⅳg層は擂鉢状に低くなっている4・5A、4・5Bグリッドにのみ堆積する。なお、3列より西側ではⅢ層以上が削平されてⅣ層は分布しない。V"層・V'"層はV層より下に局所的に分布する。当初これについては遺構の可能性があると考えたが、V'"層中に自然木を含むものもあるので、木が遺存していないものについても自然木の痕跡の可能性が高く、遺構ではないと結論付けた。

4 遺 構 (図版2～4・6・10～14)

A 概 要

本遺跡では標高0.5～0.6mの比較的高い場所において、土坑6基、溝状遺構3条、性格不明遺構3基を検出した。遺構覆土は基本的にはⅣ層の黒褐色粘土を主体とする。遺構覆土に含まれる遺物の多くは土師器細片のため、詳細な時期の検討は困難であるが、古墳時代あるいは古代の遺物であると考えられる。ただし、遺構を被覆するⅣ層は近世に生成された層であると推定され、なおかつ遺構覆土はⅣ層の土を基本としているので、埋没は近世の可能性が高い。よって、遺構の構築時期は近世以前ということはできるが、詳細な時期決定は困難である。

B 遺 構 各 説

(1) 土 坑 (図版6・12・13)

B区で検出されたSK6・7・9は4B21・5B16に分布する。

SK6 4B20に位置する。長軸約86cmの不整円形を呈し、深さ8cmを測る。底面に緩やかな凹凸が見られる。出土遺物はない。

SK7 4B20に位置する。長軸約67cmの不整円形を呈し、深さ19cmを測る。底面に緩やかな凹凸が見られる。出土遺物はない。

SK9 5B16に位置する。長軸約60cmの皿状の土坑である。深さ12cmを測る。覆土は単層。出土遺物は土師器細片2点である。

SK15 4A24・25に位置する。長軸約65cmの不整円形を呈し、深さ15cmを測る。覆土は単層。出土遺物は土師器細片1点である。

SK16 4B12に位置する。南側が調査区外へ連続し、北側が試掘05-11トレンチに破壊されているため全容は不明である。土層断面では東西幅約80cm、深さ30cmを測り、SX1の東側を掘り込んでいる。覆土はⅣa層が流れ込んだような堆積状況を示すので、近世以降の埋没である。出土遺物はない。

SK14 3E9に位置する。A区で検出された唯一の土坑であるが、南側を下水道敷設のための掘削で破壊されている。現存長約36cmの梢円形を呈し、深さ20cmを測る。覆土は単層。出土遺物はない。

(2) 溝状遺構(図版3・4・11・14)

SD5 4A17・18で検出された、東西に伸びる長さ425cmの溝状遺構である。北側が攪乱によって破壊されているため、全容は不明である。底面の凹凸が激しい。覆土は単層であるが、ほかの遺構と異なり、暗灰色土を基本とする。出土遺物は土師器細片6点。

SD13 5A16から5B11にかけて南北に伸びる溝状遺構である。北側が調査区外へ連続するが、検出した部分で880cmを測る。幅はほぼ30~80cmで不規則に変化する。深さは7cm程度であるが、底面には凹凸がある。覆土は2層に分層されるが、基本的にはIV層を主体にV層由来の灰色シルト質粘土が径1~3cmのブロックで含まれる。出土遺物はない。

SD12 4E8・12にかけて南北に伸びる溝状遺構である。南側が調査区外へ連続し、北側が攪乱によって破壊されているが、検出した部分で390cmを測る。幅は25~70cmで、北側が若干幅広い。深さは18cm程度である。覆土は単層。出土遺物はない。

(3) 性格不明遺構(図版3・6・13・14)

SX1 3B9・10、4B6ほかに位置する。南側が調査区外へ連続し、東側が試掘05-11トレンチに破壊されているため全容は不明である。調査区南壁セクションではSK16がSX1の東端を掘り込んでいる様子を観察できるが、それを超えてSX1が連続する様子は見られない。東西670cmほどの大きさであったのである。底面の凹凸が激しく、中央付近に深さ15cm程度の窪みがある。覆土は黒褐色粘土の単層である。遺物は土師器細片6点である。このうち1点は古墳時代の甕の口縁部破片(図版7-6)である。

SX3 3A24・25、3B4・5ほかに位置する。南側40cmのところにSX1が軸をほぼ同じくして分布する。平面形は長方形を呈し、長軸410cm、短軸340cmを測る。掘り込みはごく浅く、底面の凹凸が激しい。深さは8cm程度である。覆土はSX1とほぼ同質の黒褐色シルトの単層である。底面から古代の土師器小甕の底部片(図版7-14)が出土している。

SX10 4A19・24に位置する。東側は検出できなかったが、検できた部分は長軸160cm、幅150cmの不整長方形を呈する。深さは約8cmである。検出面においては、直径10cm程度の黒色土と灰色土の渦巻きが密集しているような状態であった。この渦巻きはIV層削削時から認められたので、近世以降の所産と考えられる。この渦巻きを断面で見ると、半円の中心部に黒褐色砂層、その外側に黒褐色粘土層、一番外側を暗灰黄色粘土層が包み込むような状況であった。踏み込み痕や噴砂痕の可能性もあるが、断定は難しい。出土遺物はない。

SX11 4E10・15、5E6・7ほかに位置する。南側が調査区外へ連続し、東側が攪乱に破壊されているため全容は不明である。検出部分は方形を呈し、1辺620cmを測る。底面の凹凸が激しく、深さは10cm程度である。覆土は単層である。覆土から土師器細片1点が出土している。

SX19 4E10に位置する。SX11の底面で検出された。SX11の削削時には検出できなかったので、SX11に先行するか、SX11に付随するものと考えられる。覆土はSX11が黒褐色粘土を主体にしていたのに対して、砂粒を多く含むオリーブ黒色シルトである。

5 遺 物 (図版7・15)

A 概 要

本遺跡では浅箱 ($54 \times 33 \times 10\text{cm}$) 換算で2箱分の遺物が出土した。遺物はIV層から縄文土器1点、石器1点、古墳時代の土師器68点、古代の土師器6点・須恵器8点、中世の珠洲焼1点・黒寧元寶1点、時代不明の土師器22点が出土した。IV層出土遺物の分布状況を見ると、標高0.4m以下の地形的に低い部分に集中していることがわかる(第9図)。遺物に顕著な水磨は見られないので、調査区外からの流れ込みだとしても、近隣に供給源を求められよう。ほかに、I～III層の現水田床土から近世～近現代の陶磁器、現代のガラス等が出土した。

B 各 説

ここでは特記事項について記すので、個別の属性は観察表を参照願いたい。

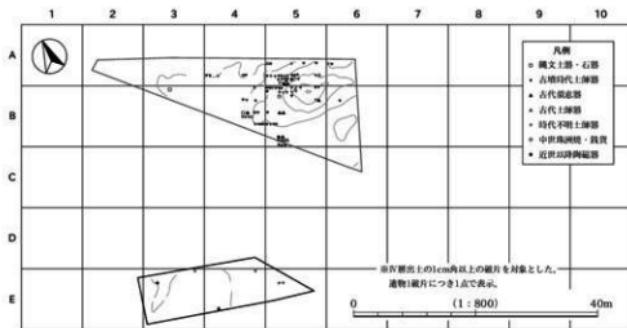
(1) 縄文時代・弥生時代の遺物 (1～5)

1・2は縄文土器である。1は比較的薄手で堅緻である。2は厚手で器面調整が粗雑である。3は弥生土器の壺で、横走沈線に区切られた文様帶内が赤彩されている。

4・5は白色の凝灰岩製の剥片である。いずれも打面は單剥離打面で、剥離の際に打面調整が行われている。4の左側縁には微細な剥離痕がある。

(2) 古墳時代の遺物 (6～13)

6～9は土師器甕の口縁部、10は底部である。いずれも細片のため、口径・底径は推定である。口縁部は「く」の字で端部は面取りされず、丸く收められている。6はSX1覆土から出土した。8は口縁部が短く外反するので、前期末～中期の可能性がある。9は体部外面のハケメの荒さから、中～後期に属する可能性がある。12は小型の有段口縁甕あるいは鉢と推定される。11は球脇の小型壺、13は器台である。「く」の字口縁の甕、小型の有段口縁甕、器台という土器組成から、一部に中・後期に下るものがあるも



第9図 武左衛門裏遺跡 IV層出土遺物分布図

の、主体となる時期は前期であると考えられる。

(3) 古代の遺物 (14~22)

14・15は土師器小型壺である。14はSX3底面に食い込んで出土した。15は内面にロクロ調整による凹凸が明瞭に残る。16は須恵器無台杯で、底部回転ヘラ切りである。18~22は須恵器壺の破片であるが、21・22は砥石に転用されている。21は内面と下側の破断面の磨耗が顕著で、外面と左側縁もわずかに磨耗している。22は外面と上側の破断面がわずかに磨耗している。

(4) 中世の遺物 (23・24)

23は珠洲焼の壺部破片である。24は表裏面とも磨耗が顕著で、文字が不鮮明となっているが、熙寧元寶とみられる。熙寧元寶は1068年、北宋で鋳られたものである。本遺跡で明らかに中世と見られる遺物はこの2点のみである。

6 武左衛門裏遺跡のプラント・オパール

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

A はじめに

武左衛門裏遺跡では中世頃の水田跡ではないかと考えられている遺構が検出されており、プラント・オパール分析からその可能性について検討した。また性格不明の遺構についてもその手がかりを得る目的でプラント・オパール分析を行った。

B 試料と分析方法

分析用試料は6C8グリッドより採取された基本土層I~V層の5試料と、不明遺構SX1・SX3・SX11より採取された3試料の計8試料である。各試料について、基本土層のI層試料は暗灰色砂質粘土、II層は暗灰色粘土、III層は黒灰色粘土、IV層は暗灰色粘土が混じる黒色粘土、V層はオリーブ灰色の砂質粘土~粘土質砂である。またSX1は褐色を帯びた黒灰色砂質粘土で、灰色の粘土質砂が塊状に混入している。SX3も褐色を帯びた黒灰色砂質粘土で、暗灰色の粘土質砂が塊状に混入している。SX11はやや砂質の黒~黒灰色粘土で、粘性が高くなっている。これら8試料について下記の方法にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスピース(直径約40μm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレバラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについてガラスピースが300個に達するまで行った。

C 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピース個数の比率から試料1g当りの各ブ

ラント・オパール個数を求め(第1表)、それらの分布を第10図(基本土層)、第11図(遺構覆土)に示した。以下に示す各分類群のラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

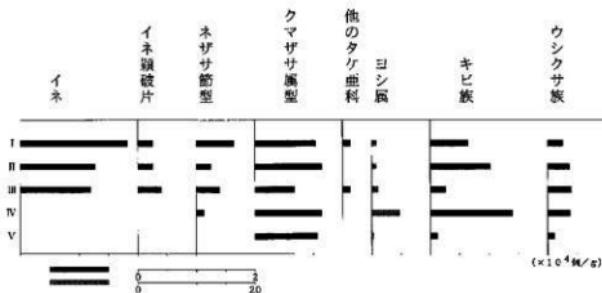
基本土層 上位3試料より10,000個以上のイネのラント・オパールが検出され、イネの穂部に形成される珪酸体の破片も若干検出されている。

イネ以外について、ヨシ属はIV層試料で突出した検出個数約47,000個を示している。クマザサ属は大きな変動は無く、4試料で10,000個を少し越えている。キビ族はII層とIV層で10,000個を越える個数を示している。その他ネザサ節型、ウシクサ族などが検出されている。

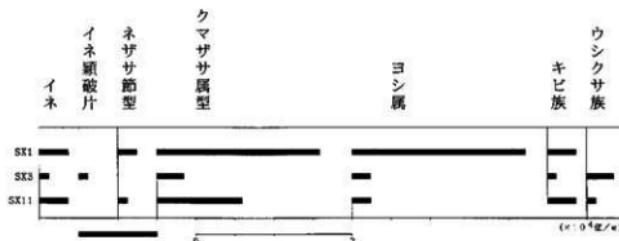
遺構覆土 全試料よりイネのラント・オパールが検出されているが、個数的には3,000個前後と基本土層の上位3試料に比べかなり少なくなっている。またイネの穂部破片がSX3より若干検出されている。

試料番号	イネ (個/g)	イネ穂破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)
I	18,200	2,600	6,500	10,400	1,300	7,800	0	6,500	2,600
II	12,700	2,500	2,500	11,500	0	7,600	1,500	10,200	3,800
III	12,000	4,000	4,000	6,700	1,300	10,700	0	2,700	4,000
IV	0	0	1,300	11,400	0	47,100	0	14,000	3,800
V	0	0	0	10,600	0	2,400	0	1,200	1,200
SX1	3,700	0	2,500	20,900	0	22,100	0	3,700	0
SX3	1,200	1,200	0	3,500	0	2,300	0	1,200	3,500
SX11	3,600	0	1,200	10,900	0	2,400	0	3,600	1,200

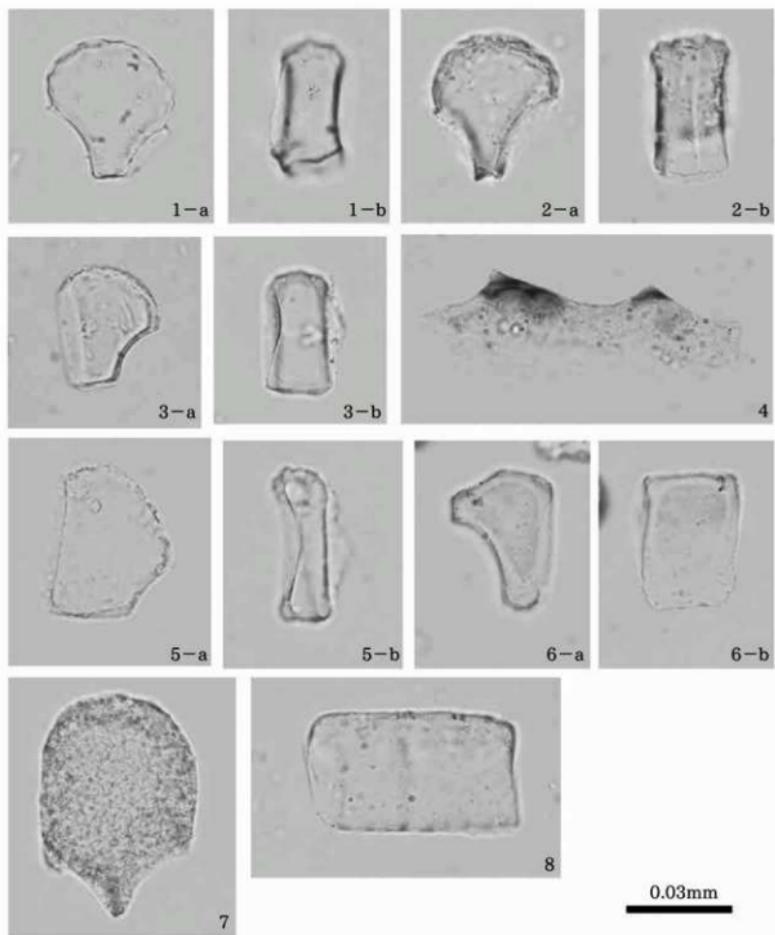
第1表 試料1g当たりのラント・オパール個数



第10図 基本土層のラント・オパール分布図



第11図 遺構覆土のラント・オパール分布図



1~3:イネ (a:断面、b:側面) 1: I層、2: III層、3: SX1

4:イネ頸部破片 III層

5:クマザサ属型 (a:断面、b:側面) IV層

6:ウシクサ族 (a:断面、b:側面) II層

7:ヨシ属 (断面) SX1

8:キビ族 (側面) I層

第12図 武左衛門裏遺跡のプラント・オパール

イネ以外ではSX1においてクマザサ属とヨシ属が20,000個を越えており、同試料のその他の分類群は3,000個前後を示している。またSX13ではクマザサ属が10,000個を越えているが、他の分類群は3,000個前後である。

D 稲作について

上記したように、基本土層では上位3試料よりイネのプラント・オパールが検出されたが、下位の2試料（IV層・V層）からは検出されなかった。発掘調査で水田跡が考えられているのはV層上面であることから、プラント・オパール分析からこの水田稻作を支持する結果は得られなかつたと判断される。上位3試料については10,000個以上を示しており、これは水田址の検証例から示されている試料1g当り5,000個以上〔藤原1984〕をはるかに越える個数を示している。こうしたことから上位3層（I～III層）については稻作が行われていた可能性は高いと判断される。

よって6C8グリッド付近におけるイネ科植物の変遷としては、V層堆積期は砂の堆積がみられることから河川の影響が強かったと推測され、その後IV層堆積期には次第に河川の影響が少くなり、ヨシ属が急速に増加して大群落を形成し、このヨシ原を切り開いて水田稻作がIII層堆積期以降行われるようになつたと推測される。しかしながら上位3試料については現代の水田耕作の影響を強く受けていると考えられていることから上に示した変遷についてはさらに検討が必要であろう。

E 遺構覆土について

SX1ではヨシ属が最も多く検出されており、これは基本土層のIV層と似た傾向と思われる。しかしながらイネが若干ではあるが検出されており、この点でIV層とは異なっている。このイネの産出についてみると、本遺構において稻作が行われていたとは考えられないことから、周辺部の稻作地やイネを用いた施設よりもたらされたと推測される。しかしながら基本土層のIV層でイネは得られておらず、IV層・V層における稻作の可能性は低いとプラント・オパール分析からは判断されている。こうしたことからSX1におけるイネは水田稻作地以外よりもたらされたと推測され、これについては他の2遺構についても同様である。

SX3・SX11については突出した出現は認められず、イネの検出を除いて強いて言うのであれば基本土層のV層に似た産出傾向を示していると思われる。

このように遺構覆土におけるプラント・オパール分析から各遺構の特徴を示す結果は得られず、どのような用途の遺構であるかの手がかりは得ることができなかつたと考える。

引用文献

藤原宏志 1984 「プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査」『考古学ジャーナル』227 p.2-7

7 ま と め

昭和30年代に清水武左衛門氏竹藪で弥生土器・土師器・須恵器が表面採集できる場所として知られていたが、武左衛門裏遺跡に相当する。昭和48年当時の県の遺跡台帳では、遺跡範囲は標高の高い畠や果樹園のある100m四方の範囲に限定されていた。今回調査した場所は国道49号亀田バイパス拡幅工事に

伴う平成17年度の試掘調査によって抵張した部分である。

調査地点は調査直前まで水田だった所で、大日本帝国陸地測量部明治44年測図においても同様の土地利用がなされており、もともと宅地などには利用されてこなかった場所である。地形的に見ても、旧来の武左衛門裏遺跡が砂丘上に立地しているのに対して、調査範囲は旧河道にあたり、洪水時にはここを洪水が走ると考えられている土地である〔大矢・加藤1984〕。

調査では住居などは検出されず、土坑・溝・性格不明遺構等が確認されたに過ぎない。上記のような立地であることを踏まえれば、住居が検出されなかつたのは当然の結果であると言える。遺構面を覆う層は近世に生成されたと推定され、縄文時代～近世の遺物を包含していた。この層の成因は不明だが、洪水堆積によるものかもしれない。ただし、遺物に顕著な磨耗は認められてないので近隣に供給源を求めるよう。検出された遺構のうち、性格不明遺構としたものが3基ある。SX1・3・11のうち、SX3については全容を把握できたものの、SX1・11については擾乱および調査範囲外にかかるため全容を把握しきれなかつた。それでも、3遺構に共通する点として、①深さが10cm程度の浅い皿状を呈する、②底面の凹凸が激しい、③平面形がほぼ隅円方形を呈するなどの点を抽出することができる。このような特徴は、新潟市(旧新津市)細池遺跡で検出された中世の凹地遺構〔小池1994〕に見ることができる。細池遺跡の凹地遺構は、A類：周溝を伴う不定形のもの、B類：溝状、C類：方形に3分類されている。武左衛門裏遺跡で検出されたSX1・3・11はこのうちのC類に類似する。細池遺跡の凹地遺構C類には底面がほぼ平坦になるものと凹凸の著しいものの2形態がある。覆土は黒褐色土単層のものと、下層に地山の土を敷き入れ、底面のレベル調整をする2層構造のものがある。凹地遺構の性格については耕地整理以前の「堀田」に類例を求め、作物を栽培する田畠の各部位施設であり、これに伴う溝は凹地遺構の用排水または通水を目的に掘削されたものであろうと推測されている。A～C類は地形の勾配に合わせた一連の通水系統の中で配置されており、栽培する作物、あるいは栽培技術の違いが形態差になって現れていると考えられている。そして、通水用の溝を伴わない凹地遺構は、降水や浸出した地下水、あるいは他所から運搬された水によって使用したと推定されている〔小池1994〕。武左衛門裏遺跡のSX1・3・11を凹地遺構とすると、調査した範囲に限定してみれば、細池遺跡に見るような系統だった通水系統は見られず、いずれも単独で存在している。また、遺構底面にレベル調整のための上の敷き込みではなく、地下水が浸出することもなかつた。このため、水田等として利用するならば他所から水を運搬してくる必要があったであろう。構築時期は近世以前ということは確実であるが、細池遺跡に倣い、中世の可能性もある。

上述したとおり、調査で検出された性格不明遺構は凹地遺構、すなわち近世以前の田畠である可能性が考えられる。立地や最近までの土地利用のあり方から見ると水田の可能性が高い。

そこで、基本層序とSX1・3・11覆土についてプラント・オパール分析を実施した(第6節)。分析結果はV層上面ではプラント・オパールは検出されず、覆土についても遺構において稲作が行われていたと考えられるような値は示されなかつた。よって、遺構の形態からは水田の可能性を指摘できるが、確實視はできないという結論が導かれる。しかしながら、遺跡のある亀田郷は「地図にない湖」とも称され、昭和24年に栗ノ木川に排水機が完成し、大規模な土地改良事業が実施されるまでは、収穫時に湛水が70cmに及ぶところが多く、稲は小舟で田面上を運搬するような状況であった〔津田1973〕。このような水田耕作が行われてきた地に水田遺構の覆土およびプラント・オパールが果たして遺存するのか、という疑問が最後に残る。

要 約

城所道下遺跡

- 1 城所道下遺跡は新潟市江南区城所字道下甲 96 番地 1 ほかに所在する。遺跡は新潟砂丘の最も内陸側にある新砂丘 I の南側に広がる後背湿地に位置する。標高は 0.7 ~ 1.0m である。
- 2 遺跡の調査は国道 49 号亀田バイパス拡幅 4 車線化に伴い、平成 18 年 5 月 22 日 ~ 6 月 9 日に県教委が実施した。
- 3 試掘・確認調査の段階で遺跡の遺存状態が良好ではないことが予想されたため、本調査では、はじめにトレンチ調査を実施した。その結果、出土遺物数が少なく遺構も見られなかつたため、面的な調査は行わずトレンチ調査に留めた。調査対象面積 2,660m² に対して実質調査面積は 373.26m² である。
- 4 調査の結果、古代の土師器 5 点・須恵器 3 点、寛永通宝 1 点、砥石 2 点が出土したものの、遺構は検出されなかつた。
- 5 調査区西側では、基本層序が不安定に堆積する部分が確認された。人為的なものか、自然現象によるものかは、明らかにすることはできなかつた。

武左衛門裏遺跡

- 1 武左衛門裏遺跡は新潟市江南区日本 3 丁目 34 番地ほかに所在する。遺跡は新砂丘 I 内陸側の南斜面とこれを横断する旧河道跡にかけて立地する。今回の調査対象地は旧河道跡にあたり、標高は 0.1 ~ 0.6m である。調査対象面積 800m² に対して実質調査面積は 623.50m² である。
- 2 遺跡の調査は国道 49 号亀田バイパス拡幅 4 車線化に伴い、平成 18 年 4 月 17 日 ~ 平成 18 年 6 月 9 日に県教委が実施した。
- 3 調査の結果、単一時期の包含層ではなく、縄文時代～近世の遺物が同一包含層から出土した。遺構は土坑・溝状遺構・性格不明遺構を検出した。性格不明遺構には水田痕の可能性があるものもある。遺構出土遺物は古墳時代・古代の土器があるが、点数が少なく包含層の堆積も不安定なので、遺構構築時期を断定するのは困難である。
- 4 IV 層（包含層）出土遺物には、縄文土器 1 点、石器 1 点、古墳時代の土師器 68 点、古代の土師器 6 点・須恵器 8 点、時期不明土師器 22 点、中世の珠洲焼 1 点、黒寧元寶 1 点がある。ほかに I ~ III 層（現水田床土）から近世～近現代の陶磁器等が出土した。

引用・参考文献

- 家田順一郎 1986 「小丸山遺跡」 新潟県横越村教育委員会
- 五十嵐太郎 1996 「亀田郷一信濃川・阿賀野川の下流低湿地における治水」『第四紀研究』35-3 日本第四紀学会
- 上野一久・春日真実 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第87集 国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書 上郷遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 江口友子 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第102集 国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書IV 川根谷内墓所遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 大熊 孝 1996 「越後平野の治水と河川開発史」『第四紀研究』35-3 日本第四紀学会
- 大矢雅彦・加藤泰彦 1984 「阿賀野川水害地形分類図・同説明書」 建設省北陸地方建設局・阿賀野川工事事務所
- 小山正忠・竹原秀雄 2004 『新版 標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局
- 亀田町史編さん委員会 1988 『亀田の歴史』 通史編 上巻 新潟県亀田町
- 川上貞雄 1982 『亀田町文化財調査報告2 中の山遺跡』 新潟県亀田町教育委員会
- 川上貞雄 1993 『横越村文化財調査報告 山ん家遺跡緊急発掘調査報告書』 新潟県横越村教育委員会
- 川上貞雄 1996 『亀田町文化財調査報告書第4集 荒木前道路 第2次調査』 新潟県亀田町教育委員会
- 川村浩司 1989 「越後の古代集落の素描—遺跡の類型とその展開ー」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学講話会
- 小池義人 1994 「第IX章1.中世の凹地遺構と溝について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 細池遺跡・寺道上遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人・須藤高志・荒川隆史 1994 「第III章4.遺構各説」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 細池遺跡・寺道上遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小林 弦 1959 「第二節 考古学よりみた亀田町」『亀田町史』 新潟県亀田町
- 酒井和男 1980 『三王山遺跡』 新潟県亀田町教育委員会
- 酒井和男 1990 「第一章 原始」『亀田の歴史』資料編 亀田町史編さん委員会・新潟県亀田町
- 酒井和男 2000 「原始・古代 原始・古代の横越 第一章 横越町の遺跡概観」『横越町史』資料編 新潟県横越町史編さん室
- 田中久夫ほか 1996 「新潟砂丘の形成史」『第四紀研究』vol.35 No.3 日本第四紀学会
- 田村順三郎 1950 『大江山村郷土史』第一巻 新潟県大江山村
- 立木(土橋)由理子ほか 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第91集 国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書甲子道遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 津田秀穂 1973 「I 地形分類図」『下越開発地域 土地分類基本調査 新潟』 新潟県農地部農地計画課
- 新潟古砂丘グループ 1974 「新潟砂丘と人類遺跡—新潟砂丘の形成史!—」『第四紀研究』13-2 日本第四紀学会
- 新潟市教育委員会 1996 『新潟市蔵岡枕山前遺跡現地説明会資料』 新潟県新潟市教育委員会
- 新潟市史編さん原始古代中世部会 1994 『新潟市史』資料編1 原始古代中世 新潟県新潟市
- 新潟市史編さん自然部会 1991 「第1章 地形」『新潟市史』資料編12 自然 新潟県新潟市
- 渡辺ますみ 1991 『亀田町文化財調査報告書第3集 荒木前道路』 新潟県亀田町教育委員会

武左衛門裏遺跡 土器検察表

法源丸例：（ ）付は確定、前十九例 英：否、長：尺六、角：角四五、肉封：肉封無。

順位 No.	通称名	グリッド	部位	時代	剖面	断面	標示	法基 (m)	前七	色調	検査		備考	
											内面	外面		
1		4314	N-a	绳文	横壓	圓錐	削		灰、灰、白砂	内：深灰色 (7.5YR4/1) 外：深灰色 (7.5YR5/1)	+	-	複合陶文LR	
2	05 - 117y	4B	III	繩文	側壓	圓錐	削		灰、灰、角	内：灰-褐色 (7.5YR7/3) 外：灰-褐色 (7.5YR7/3)	+	-	繩文LR	
3	05 - 117y	4B	III	參生	中腹	◎	削		灰、灰、角	内：灰-褐色 (7.5YR7/4) 外：赤鉄、赤色 (1084/8)	+	-	繩文LR地文 柱上に沿る凹線	
6	SK3	4312	1	古墳	前削	土師器 壁	削	1.1	1.1 : (21.8)	灰、灰、白砂	内：褐色 (7.5YR7/6) 外：褐色 (7.5YR7/6)	3.73+手	-	
7		6A16	N-b	古墳	前削	土師器 壁	削	1.1	1.1 : (14.2)	灰、灰、角	内：灰-褐色 (7.5YR7/3) 外：灰-褐色 (7.5YR7/3)	+	-	ヨコナナ手
8		5A24	N-e	古墳	鉢形	鉢形	削	1.1	1.1 : (17.6)	灰、灰、海綿	内：褐色 (5YR6/6) 外：褐色 (7.5YR6/6)	外：スヌ A、ナヌ ハゲ A →ヨコナナ	-	
9		415	N-a	古墳	前削	土師器 壁	削	1.1	1.1 : (25.0)	灰、灰、瓦體	内：褐色 (7.5YR6/6) 外：灰-褐色 (7.5YR5/3)	外：スヌ A →ヨコナナ ハゲ A →ヨコナナ	-	
10		5A20	N-b	古墳	中腹～側壓	土師器 壁	体～底	2.5	灰、灰、安山岩	内：灰-褐色 (10YR7/4) 外：灰-褐色 (10YR7/4)	+	-	体：ヘタケ手 底：ナヌ	
11		5A23	N-b	古墳	前削	土師器 壁	削	1.1	1.1 : (17.6)	灰、灰、海綿	内：褐色 (7.5YR5/6) 外：褐褐色 (7.5YR5/6)	ヨコナナ手 ハゲ A、削痕	-	
12		513	N-b	古墳	前削	土師器 壁	削	1.1	1.1 : (25.0)	灰、灰、角	内：浅褐色 (7.5YR6/3) 外：深褐色 (7.5YR5/1)	3.73+手	ミガキ	
13		5A23	N-b	古墳	前削	土師器 壁	削		灰、灰、白砂	内：灰-褐色 (7.5YR6/4) 外：赤鉄、赤色 (1084/6)	+	-	ミガキ、削痕 ヨコナナ	
14	SK3	3A25	1	古代	土師器 小型	体～底	削	(5.4)	灰、灰、白砂	内：浅褐色 (7.5YR8/3) 外：浅褐色 (7.5YR8/3)	+	-	体：ヘタケ手 底：ヨコナナ	
15		5A25	N-b	古代	土師器 小型	体～底	削	(6.0)	灰、灰、角	内：灰-褐色 (10YR7/3) 外：灰-褐色 (10YR7/3)	ロクロナナ	-	ロクロナナ	
16	05 - 117y	4B	墨土 古代	粗面削	粗面削	体	削	(8.0)	粘質	内：深灰色 (5YR1) 外：灰-褐色 (7.5YR7/3)	ロクロナナ	-	ロクロナナ	
17		517	N-b	古代	粗面削	體	削		粘質	内：深灰色 (5YR6/1) 外：深灰色 (5Y6/1)	平行タタキ	平行タタキ	ヨコナナ手 底：ヨコナナ	
18		517	N-b	古代	粗面削	體	削		粘質、表面に黒色 の斑点 L。	内：深灰色 (5Y6/1) 外：深灰色 (5Y6/1)	平行タタキ	平行タタキ	ヨコナナ手 底：ヨコナナ	
19		5B10	N-b	古代	粗面削	體	削		粘質	内：深褐色 (2.5YV6/2) 外：白鐵板、炭オーブー色 (5Y6/1)	同上	平行タタキ	平行タタキ	
20		5A22	N-b	古代	粗面削	體	削		粘質	内：深褐色 (5Y6/1) 外：深灰色 (5Y6/1)	同上	平行タタキ	平行タタキ	
23		5A23	N-b	中墳	深削	體	白砂		内：深褐色 (5Y5/1) 外：深褐色 (5Y5/1)	無	無	無	無	

観察表

武左衛門裏遺跡 石器・土製品・金属製品観察表

報告 No.	遺構名	グリッド	層位	時代	器種	法量				備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
4	3B3	IV-a	圓文・弥生	微細刻離痕ある剥片		20.0	26.0	6.0	3.0	凝灰岩質。左側縁剥離跡、右側縁欠損。
5	3A	I~III	圓文・弥生	剥片		19.0	23.0	4.0	1.8	凝灰岩質。左側縁未端欠損。
21	5A22	IV-e	古代	転用砾石		98.0	72.5	11.0	114.6	須恵器盤の口縁部破片を砾石に転用。胎土:白砂、色調:内灰褐色(N6/),外灰褐色(N5/).
22	5A23	IV-b	古代	転用砾石		53.5	81.5	7.0	43.8	須恵器盤の体部破片を砾石に転用。胎土:精良、色調:内灰褐色(N6/),外灰褐色(N4/).
24	5B2	IV	中世	鉄貨(熙寧元寶)		23.5	23.5	1.2	2.9	磨滅頗著。縁辺に漆付着。

武左衛門裏遺跡 遺構観察表

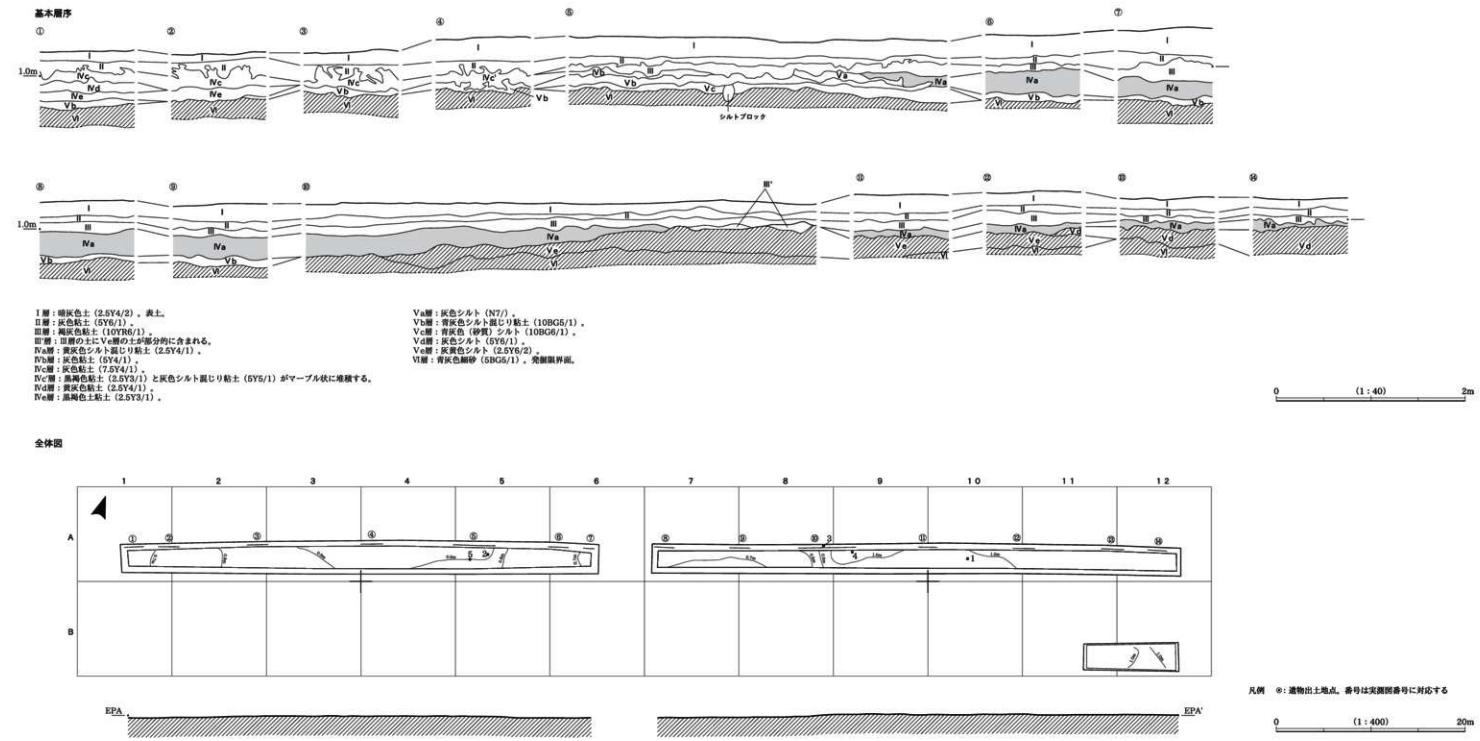
種別	遺構No.	地区	グリッド	平面形	規 模(cm)			出土遺物 (割合%)	備 考
					長径	短径	深さ		
土坑	SK6	B区	4B20	不整円形	86	72	8		
土坑	SK7	B区	4B20	不整円形	67	67	19		
土坑	SK9	B区	5B16	不整円形	60	56	12	土師器細片2	
土坑	SK14	A区	3E9	楕円形	(36)	34	20		
土坑	SK15	B区	4A24・25	不整円形	65	64	15	土師器細片1	
土坑	SK16	B区	4H12	不整椭円形	(84)	(80)	30		北側試掘トレンチにより破壊、南側調査区外へ統く
溝状遺構	SD5	B区	4A16・17・18・22・23	溝状	(425)	(87)	12	土師器細片6	北側擾乱により破壊
溝状遺構	SD12	A区	4E8・12・13・17・18	溝状	(390)	25~70	18		北側擾乱により破壊、南側調査区外へ統く
溝状遺構	SD13	B区	5A16・21・5B1・6・11	溝状	(880)	30~80	7		
性移不明遺構	SX1	B区	3B3~5・8~10・4B1・6・7・11	楕円形?	(670)	(280)	15 (6)	土師器細片6 (14)	東側試掘トレンチにより破壊、南側調査区外へ統く
性移不明遺構	SX3	B区	3A16・19・20・24・25・4A21・3B4・5・4B1	長方形	410	340	8	土師器小甌底部1	
性移不明遺構	SX10	B区	4A19・24	不整長方形	(160)	(150)	8		踏み込み痕?
性移不明遺構	SX11	A区	4E10・15・5E6・7・11・12	長方形?	(620)	(354)	10		東側擾乱により破壊、南側調査区外へ統く
性移不明遺構	SX19	A区	4E10	不整形	137	60	8		SX11底面で抽出

※規模を()で示したものは現存長を表す。

図 版

凡 例

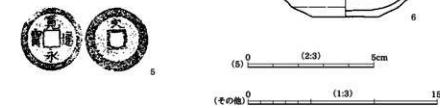
- ① 土器のうち遺存率が低く推定径で作図したものは、
口縁または底部の線を中心線のところで「T」とした。
- ② 土器断面図のうち、黒塗りしたものは須恵器である。

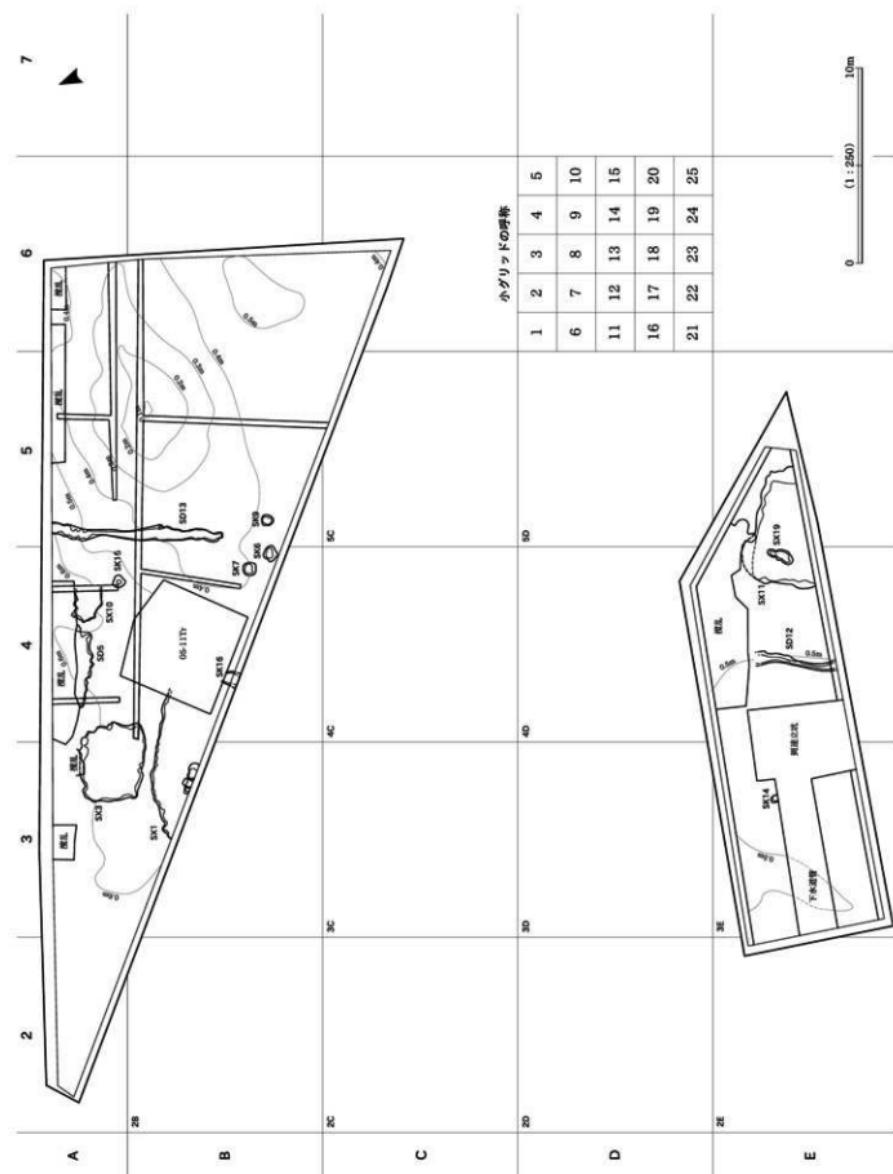


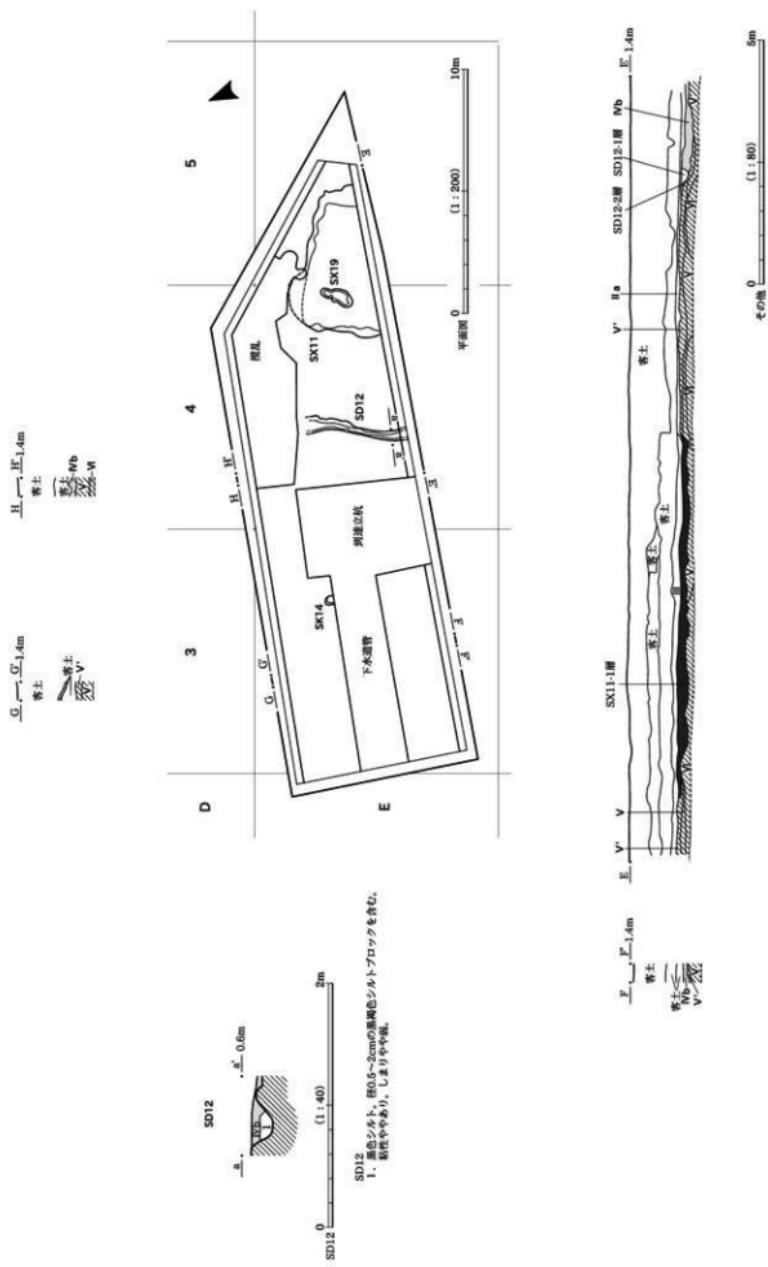
N層出土遺物

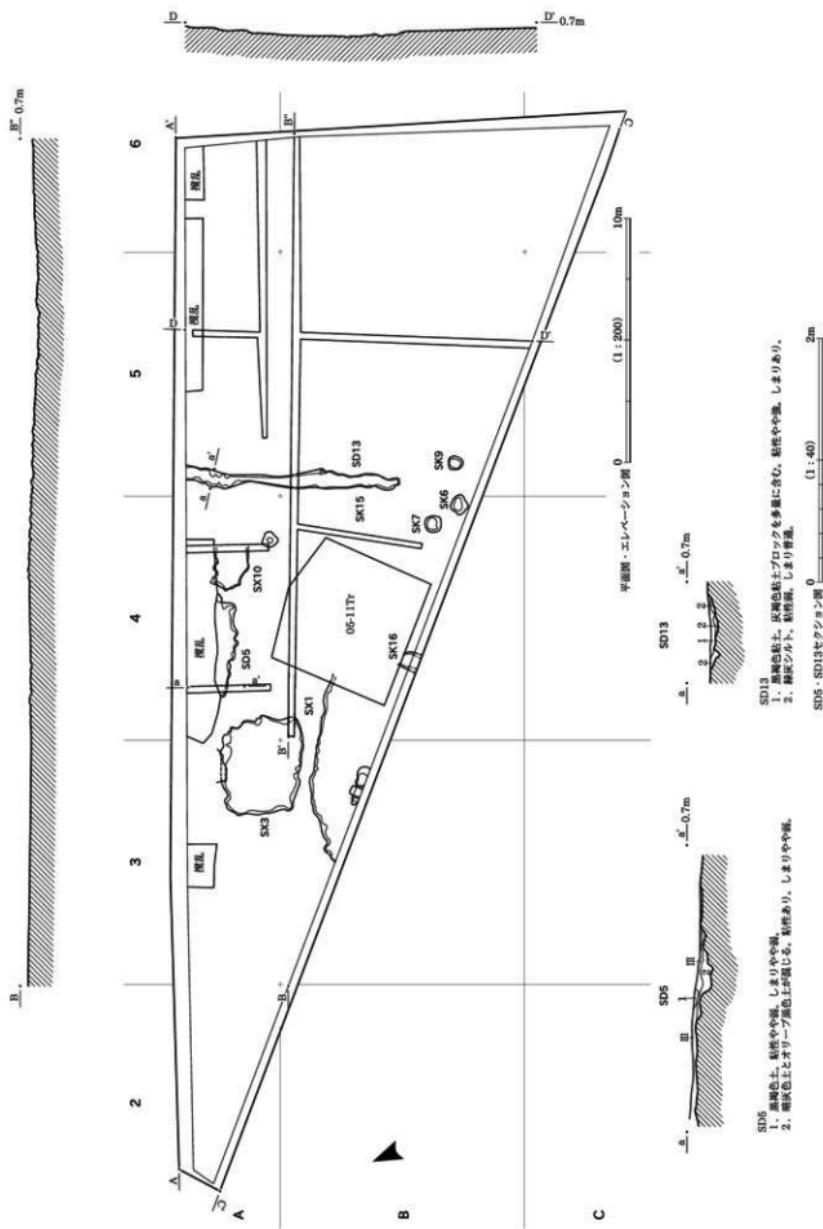


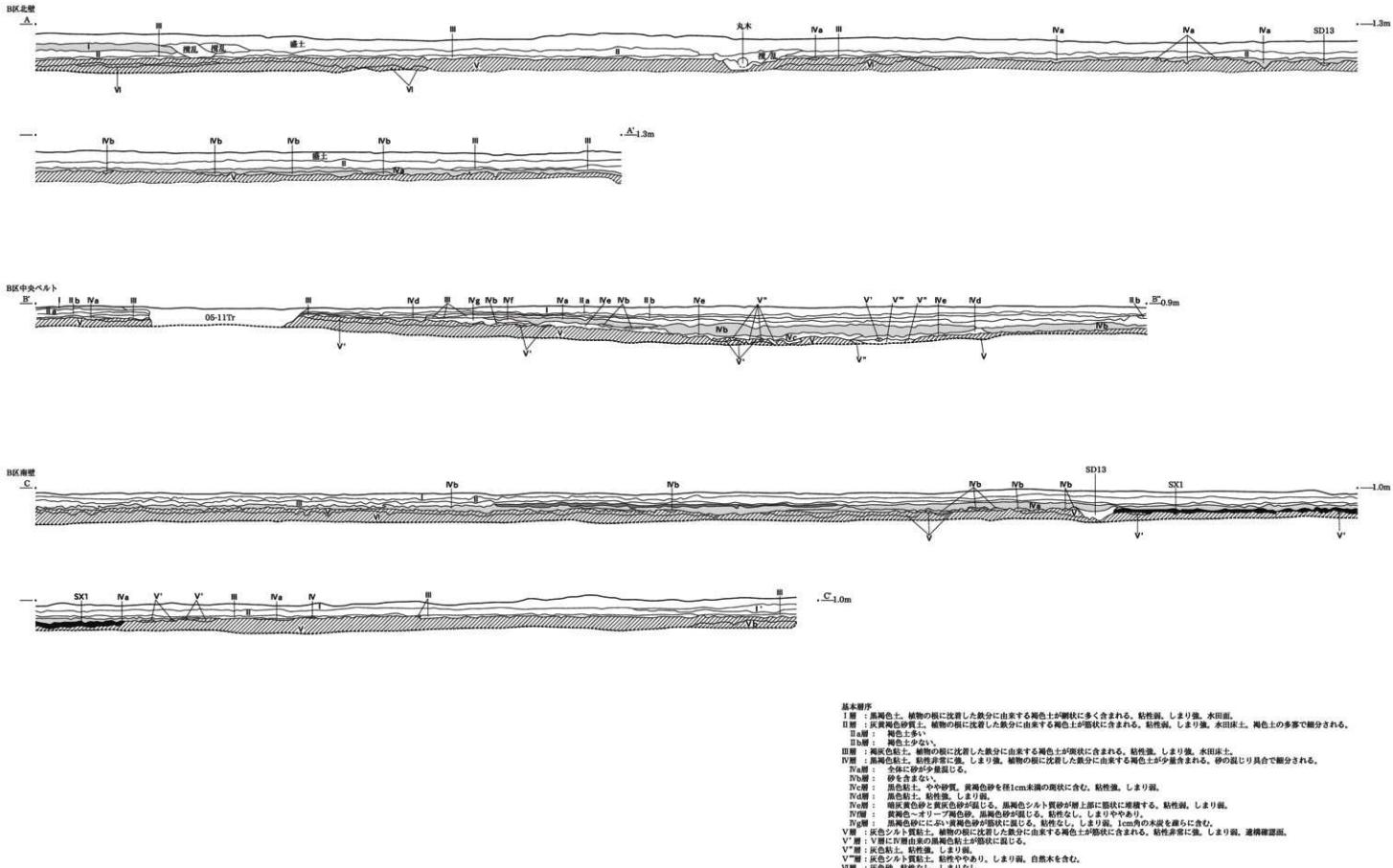
試掘開発出土遺物

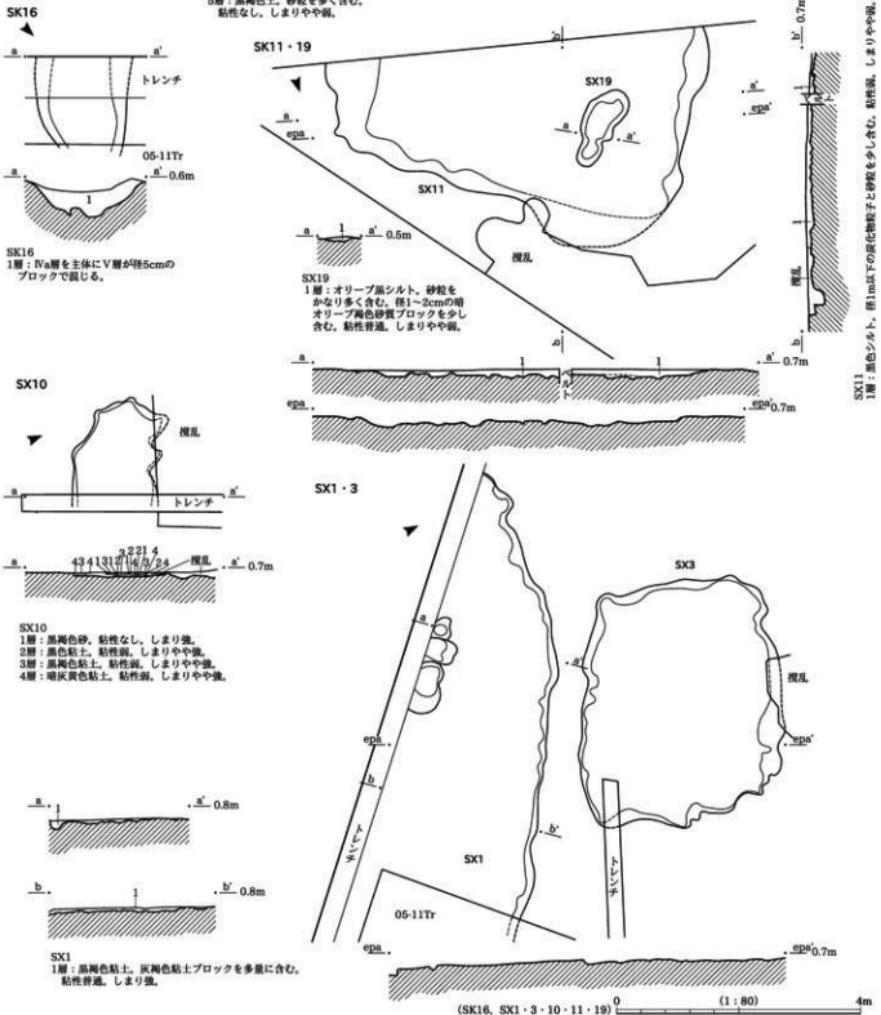
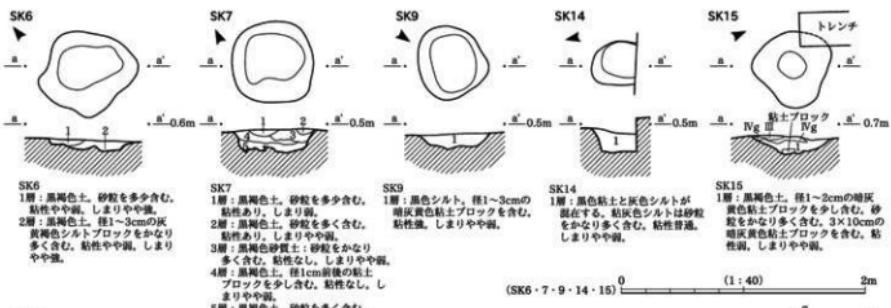








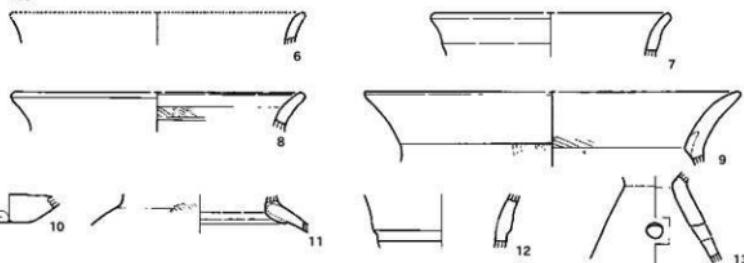




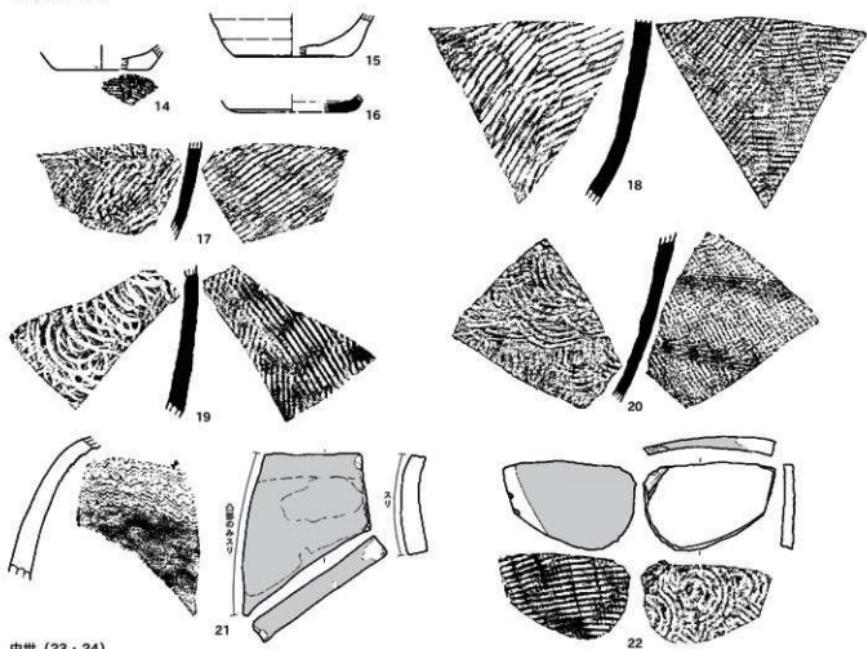
縄文時代・弥生時代(1~5)



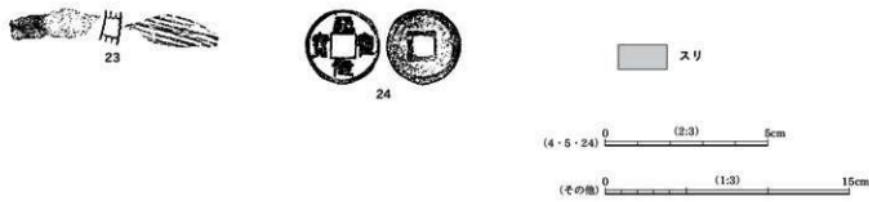
古墳時代(6~13)



古代(14~22)



中世(23・24)





トレンチ調査 完掘（東から）



トレンチ調査 完掘（西から）



西側調査区 北壁セクション(4・5Aグリッド)(南から)



西側調査区 北壁セクション②(南から)



西側調査区 北壁セクション④(南から)



西側調査区 北壁セクション⑤(南から)



西側調査区 北壁セクション⑥(南から)



東側調査区 北壁セクション(8・9Aグリッド)(南から)



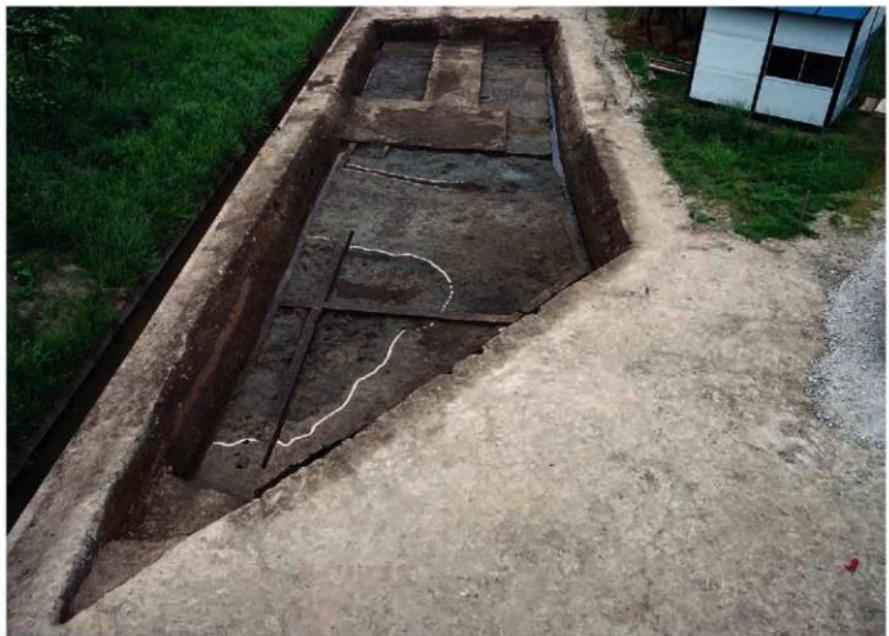
東側調査区 北壁セクション⑧(南から)



東側調査区 北壁セクション⑨(南から)



B区 全景（東から）



A区 全景（東から）



B区 南壁セクション（北から）



B区 中央ベルトセクション（南から）



SX1・SX3 完掘（東から）



SK6・7・9、SD13、SX10 完掘（南から）



SD5・13、SX10 完掘（西から）



B区 全景（西から）



A区 南壁セクション（北から）



SX11 完掘（北から）



SK6 セクション（北から）



SK6 完掘（南から）



SK7 セクション（南から）



SK7 完掘（南から）



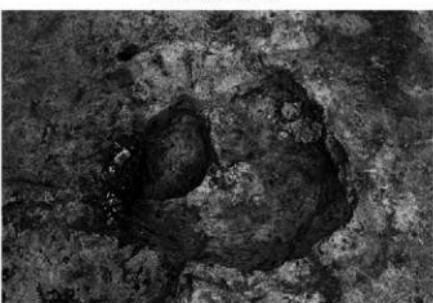
SK14 セクション（西から）



SK14 完掘（北から）



SK15 セクション（南東から）



SK9 完掘（南から）



SK16 セクション (北から)



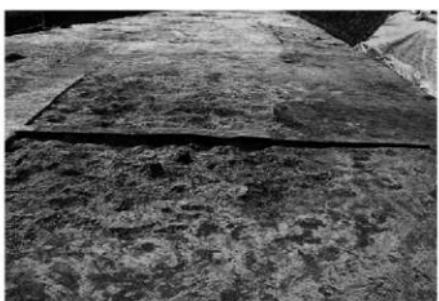
SK16 完掘 (北から)



SX1 セクション (東から)



SX1 完掘 (東から)



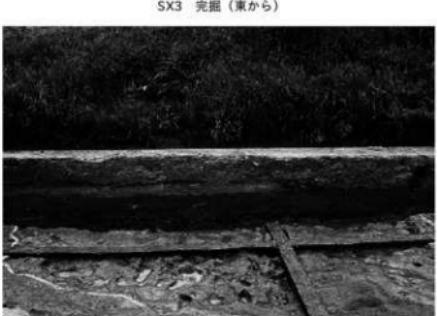
SX3 セクション (東から)



SX3 完掘 (東から)



SX11 セクション (東から)



SX11 セクション (北から)



SX11 検出状況（南から）



SX19 セクション（北から）



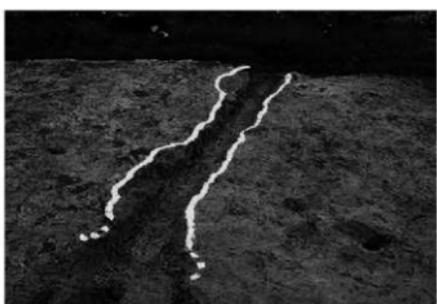
SD10 検出状況（西から）



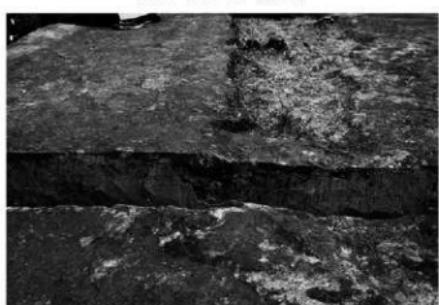
SX10 セクション・完掘（東から）



SD12 セクション（北から）



SD12 完掘（北から）



SD5 セクション（西から）

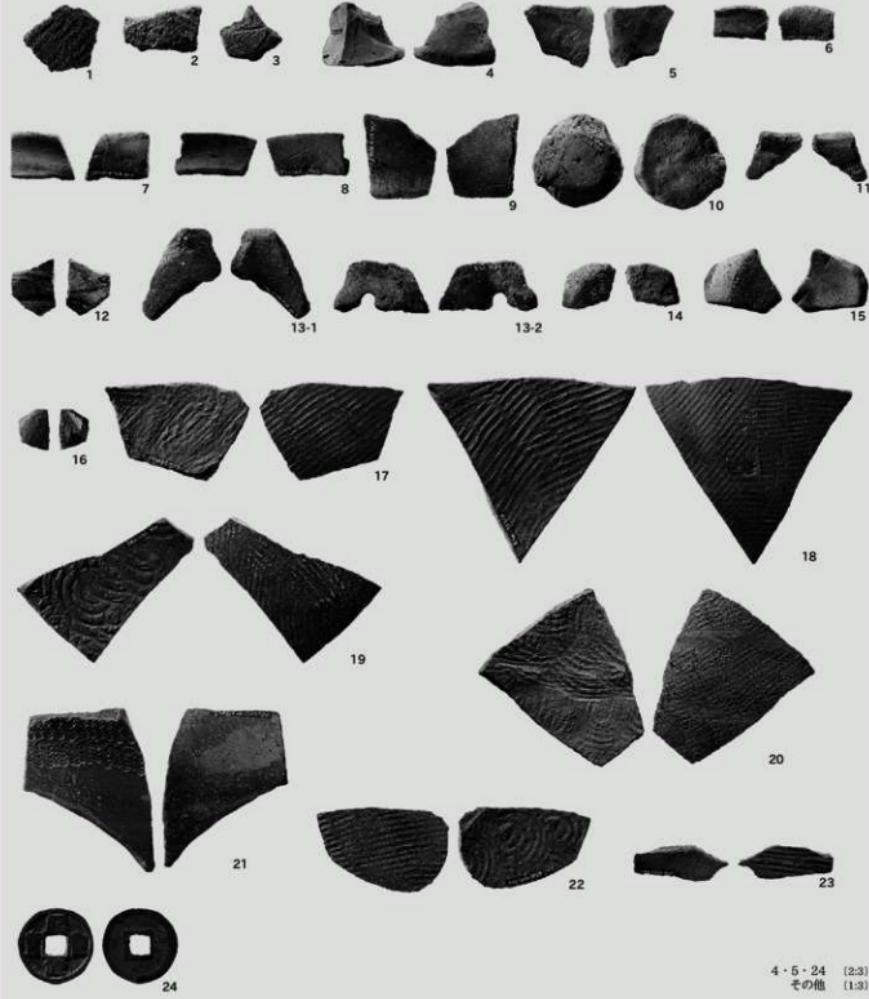


SD13 セクション（南から）

城所下遺跡



武左右衛門遺跡



報告書抄録

ふりがな	じょうしょみちしたいせき・ぶざえもんうらいせき							
書名	城所道下遺跡・武左衛門裏遺跡							
副書名	一般国道49号亀田バイパス関係発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第177集							
編著者名	土橋由理子・河崎昭一（以上、埋文事業団）、石垣義則・大谷祐司（以上、株式会社野上建設興業）、鈴木茂（株式会社パレオ・ラボ）							
編集機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981							
発行年月日	2007(平成19)年5月10日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯° '	東経° '	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
城所道下遺跡	新潟市江南区 城所学道下 甲96番地1ほか	15104	425	37° 51' 25"	139° 06' 35"	一次調査 20041004～ 20041021～ 20050825 二次調査 20060522～ 20060609	2,660	国道49号亀田バイパスの 拡幅4車線化工事
武左衛門裏遺跡	新潟市江南区 白水3丁目34番地ほか	15104	396	37° 51' 25"	139° 06' 16"	一次調査 20041004～ 20041021～ 20050411～ 20050426 二次調査 20060417～ 20060609	800	国道49号亀田バイパスの 拡幅4車線化工事
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
城所道下遺跡	集落跡	古代				古代の土師器・須恵器・寛永通宝・砾石		
武左衛門裏遺跡	集落跡	古墳時代・ 古代～近世	土坑・溝状遺構	土坑・溝状遺構	土坑・溝状遺構	縄文土器・弥生土器・石器・ 古墳時代の土師器・古代の土 師器・須恵器・珠洲焼・黒寧 元寶		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第177集

一般国道49号龟田バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ

城所道下遺跡・武左衛門裏遺跡

平成19年5月9日印刷

平成19年5月10日発行

編集・発行 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1

電話 025(285)5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1

電話 0250(25)3981

FAX 0250(25)3986

印刷・製本 長谷川印刷

〒950-2022 新潟市小針1丁目11番8号

電話 025(233)0321